明治三十年七月十日

女學雜誌

第四百四十五號

第四百四十五號目次

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◉單に十日發行の分のみを購求せんとの所望せらるゝものあらは其望に應ずべし

女學雜誌定價表

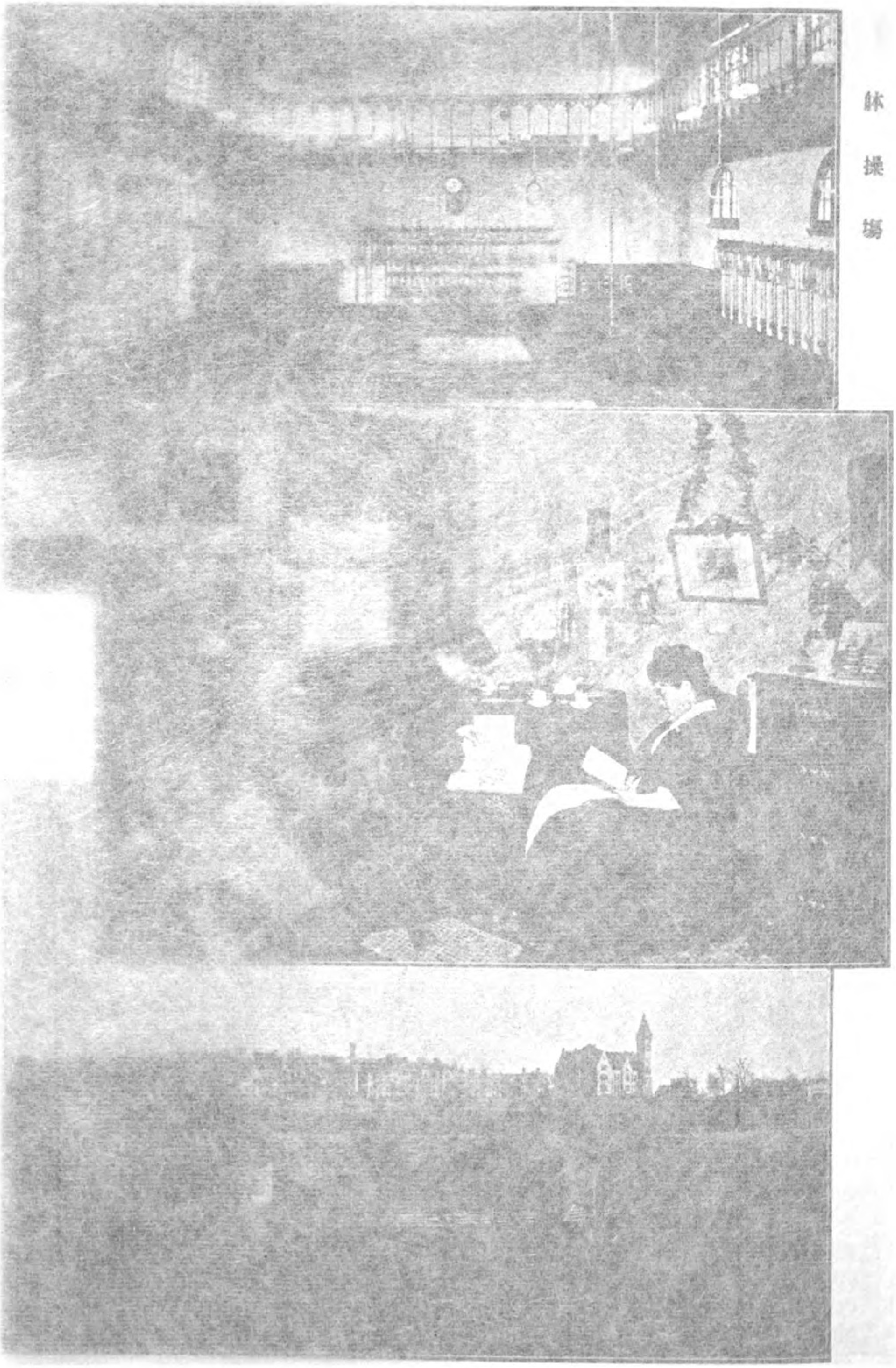
前金	壹册價金拾錢 一年前金金貳圓(無郵稅)
廣告料	一行一回(廿七字詰)前金十錢 同三回以上一割引 同六回以上二割引 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第四百四十四號目次

米國ブリ[illegible]

[illegible] MAWR, PA. U. S. A.

體操場

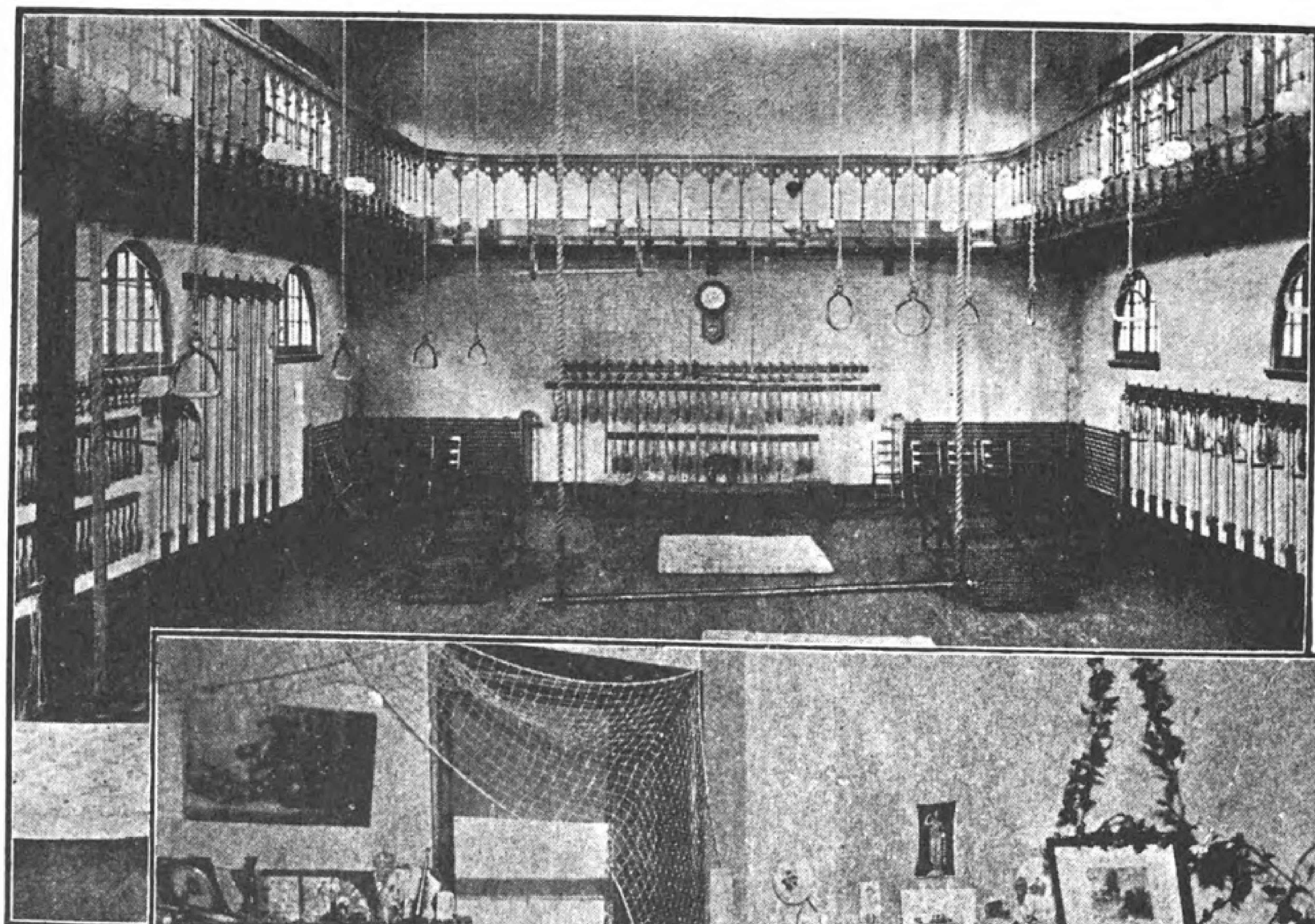


校舍[illegible]

廣告料	送金	注文
[illegible]不道徳なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く（[illegible]一割引、[illegible]二割引）	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし◎郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増たるべし	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

（[illegible]無郵税）

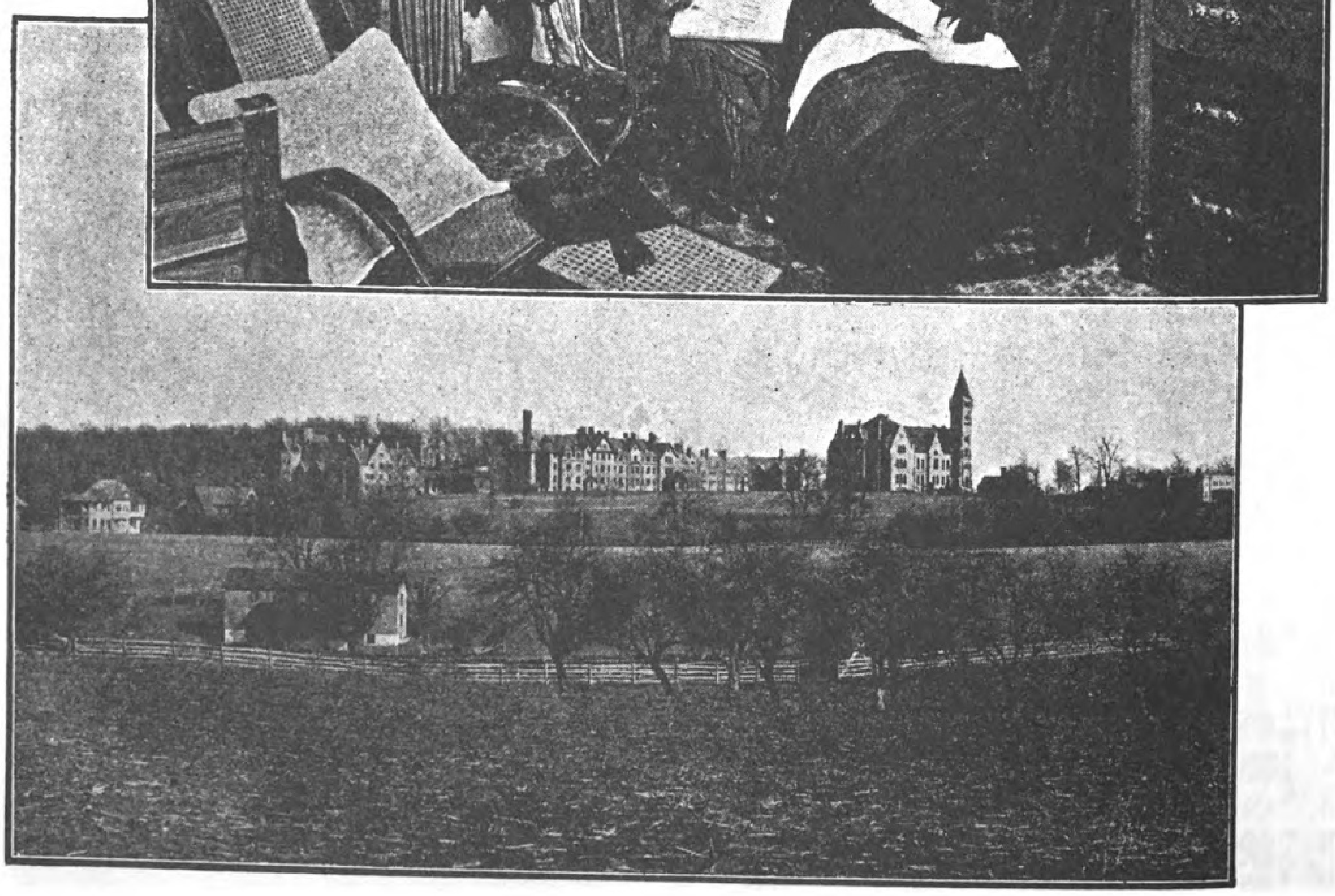
米國ブリンモーア女子大學
BRYN MAWR COLLEGE, BRYN MAWR, PA. U. S. A.



躰操場



寄宿舍



校舍全景

女學雜誌

第四百四拾五號

明治三十年
七月十日發兌

社説

外國人設立の女學校

時勢の反動は彼方、此方にさまよふものなれば、古來珍らしと云ふにもあらねど、無益の過度に推しつめて、驚いて復た飛び返るの拙さは、智者の好まざる所なるべし、及かず速かに警戒して、半途に用心し、巧みに機輪を一轉して溝壑に陷いるの患を制めんには。

本來、外國人が海波万里を横ぎりて異邦の爲に財を散らし力を枯らすの厚意は、感謝に餘りあるとなれば、苟くも常識あらんものにして、之を悅ばざる筈はなきと也。但だ夫れ外國の人にして既に斯の如くんば、吾等本邦の人にして安くんぞ默視すべけんやと奮發し、義の競爭に勇みて負けぬ程の氣慨獨立に鼓せられ、及ぶべき丈け之に拮抗し得る程の盡力を爲してんなど意氣張るも亦た一興なり。素と殊勝の勉强と云ふべし。然るに、此の本來當然の氣慨を燃やし過ごして敵意を生じ、偏狹陋隘の局量に縛ばられて、外國人着手の事業を惣べて絶滅せんことを希ひ、彼等をして全く本邦より引上げしむべしなど慷慨して、之をもて愛國心なるかの如く思惟するに至ては、憫笑の極と云はざるを得ず。

然るに、此の憫笑の極事が一時の輿論となり、對外硬など云へる餘計の振舞に伴隨して、存外の勢力を得るに至りしは、稍や驚くべし。外國人の手に育てられたる子弟は直ちに外國風となるものと觀じ、斯ては國民一統の上に莫大の障礙あるべしと憂ふると云ふ、抑も國民の統一力なるものを信ずると斯く迄に薄弱なるにも關せず、此類の掛念を懷くをもて愛國とするは古來の慣習なるが如し。餘り目出度き事にはあらざる也。

然るに、斯る杞憂を抱くは、少〻なる一個私人の類のみならず、堂〻たる一國文政の大器關に經驗あるものゝ迄が、盛んに

斯る心配を公言して、老婆の世話燒を爲すこそ心得ね。天下の事、多種多色をもて味ありとす。なまじひに一徹一途の處置に出でんとすとも、到底行はる可きことにあらず。非凡の專擅と周匝なる取締りとを以てするも、古來能く官途の意思に一向に服從せしめたることあらず。此をもて卓識ある政士は、皆な自治放任などの擒縱をよしとして、大躰に巧みに治め、斷えて煩瑣の事に頓着せざる程なるに、元來多少計畫したる僅かの官校すら意の如くならざるに際し、國中の學風をして全たく官學の如くならしめんと希望するなどは、殆んど少年の空想にひとしい哉。

又、外國人とは緣故も近かる可き宗敎家が、外國人去らずんば本邦眞誠の敎學は伸びざる如く主張するこそ奇怪なれ。世人往々基督敎徒を目して世界主義を懷くなど論ずれど、吾人が二三年來の彼派の流行を觀察せし所によれば、純然たる非世界主義なり。古來遺傳の鎖國の感情、世の風波同樣に現はれ來り、外國人に對する拮抗をもて餘程の勇氣なるかの如く言ひ做すの癖は、此處にも亦た依然として存在せり。

凡そ此等の矯激は、一時の反動に由來すること多きものなれば、

亦た他の一時となれば、別方面に矯激することもあるなるべし。而して回顧すれば、昔日の慷慨が馬鹿らしくなりて、自から其愚を笑ふの外なきに至ることならんが、之とても亦た過度の悟りに外ならねば、當にすべきものにもあらず。本來、大道に鑑みて、中庸の處置に安んじなば、何れにせよ斯る双方の誤謬はあるまじきことを覺知すべき也。

玆に一の新しき女學校を建てたりとも、夫が爲に、古風のお針の先生、琴の師匠、歌の宗匠などを撲滅せざる可らずとは思ふまじ、玆に、日本流の女學校を建てたりとも、夫が爲に西洋風の女學校を退去せざれば不都合なりと思ふべき理由は何處にある乎。日本流を好むものもあるべく、西洋流を好むものもあるべく、双方を等しく好むものもあるべし。其の好む儘に就て學ぶは、例へば、上戶が酒店にゆき、下戶が餅屋に行くに似たり。學問の事は然ある可らずなど立論して大いに懸隔あるものと見做すべき正大の理由は存在すまじ。

物の進步退步を定むべき標準は六かしきことなれど、兎に角、單純よりは複雜に、消極よりは積極に、萎靡よりは興奮に赴かんこそ進步なるべけれ。今ま、國中の學種を一徹にして、

千里同風の花の色に造作せんとすると、様々の學風を隨意に發達せしめて、相合して大和大成せしむるとは、何れか、大國民の理想たるべき。子供が食物に好き嫌ひを言ひ、人にあひて人見知りをする如く、彼は可し、此は惡ししと、自分一個の了見にて一切の世間を斷定し、之によりて他の萬人に推し及ぼさんとするは、氣の小さきこと也。凡そ改進は、改進の名を冠ぶりて輕薄の情をかくし、保守は、保守の名を利用して恐怖の心を晦ますもの也。外人に對して隆んなる事を言ふは、多くは萎靡にして自信の意にあらず。もし仔細に考ふれば、外國人の學校を敵の如くに言ひ做すは、餘り量見の廣きことにあらざる所以を容易に覺るなるべし。

此をもて吾人は誠實に外來の有志に勸告す。近年の反動は大層の如くに見ゆれど、之とて永く續く可きものにあらず。血氣鎭まりて再び昔しを慕ふに至らんは、遠からぬこと也。諸君が其資を齎し、其友を誘ひ、其力を捐てて、以て我國の公益に盡瘁せらるる事は、聰慧にして思慮ある日本の識者の衷心に感謝する所なり。諸君、冀はくは、迫害に恐れず、一時の逆境に惑はず、彌よ盛んに經綸して大に其の驥足を伸されたし。神洲の地は古來開放自由にして、多くの歸化人を同胞となし、二千六百年一和して血族の如し。たとひ一時の波瀾變化はありとも、日本海の波は、諸君の渡來を妨げず、芙蓉峯の風は、諸君の感化を塞がず、渾然として總てを容れて敢て逆らふことなき也。諸君、乞ふ、安んじて其の經綸を施こすべし。

女學生の勉學心

女學の不振とは他の事にあらず。教育者の精神の萎靡すること、女學生の勉學心の怠廢すること即ち是也とは、曾て世上に『女學不振の聲』の喧ましき時に叫破せし所なるが、時運一回轉して、女學生の勉學心近來大いに勃興するに至れり。是れ豈に女學界の一大慶事にあらずや。

古人、精神の萎靡を夏時の昏睡に喩ふ。覺めんとして醒めざるの狀態略ぼ似たり。數年前、新女學の反動其極に達したる比ほひや、女學生其の學に對するの爲躰、幾分此樣の趣むきあり。先輩切りに刺激し、教育者大いに勸誘すれども、差し

たる効驗も暫しは見えざりしが、今にして、時勢の回轉と同に其の結果は顯然になれり。何等の由來たるに關せず、先以て祝す可き事なり。

左れど、既に其の原因の時勢の一轉に根づくと多きを知る、先の萎靡は反動の爲め也、今の回復は流行の爲め也、同に世の風波に動搖せし一進一退に過ぎざる如く見えて、頗ぶる頼母しからぬ事の樣に思るれども、此は是れ人事の常態にして如何んともす可らず。流行の爲に進退せざるものの如きは至つて稀なるものとして、篤と勘辨せざる可らざる也。但だ夫れ既に其の流行に由つて來るに過ぎざるとを知るとも、能く之を活かして利用し、其の假を捉らへて、其眞を收めんとするは、識者の手腕を待つところ也歟。

昔しシバの女王、ソロモンの智慧を慕ひて遠きより來ると傳ふ、眞とに千古の美談なり。夫れ、智慧の實果は喫するもの其の味を忘る可らず、一度び其の汁を啜り其香を嗅がんほどのものは、遂に之と離るると能はざる也。もし能く學問の正路をたどりて、其の理の精髓を掬し、無益にして無理なる乾燥の手段によらざる直覺の講究に慣るるとをせば、凡そ學問の味ひほど忘れがたきものは無き筈也。之を抱きて貧すれば、貧に其道を學び、之を收めて窮すれば、窮するに其の理を覺り、いよいよ以て悅喜の情なきと能はず。たとひ人間普有の弱點に逃れずして、其都度、衝突煩悶は免れがたしとするも其間、別途の慰藉を得て、自から餘裕あるを得ると彼の無學の人に似るべくはあらざるべし。乃ち是れ學問の徳にして、彼の無學の輩の決して窺ひ知らざる所なり。苟しくも學ぶと謂はば、此邊の消息に通ずる程に達せざる可らず、苟くも人を敎ふと言はば、第一に此の脈絡に觸れしむるとを主眼とせざる可らず。學者、受學者もし此邊に覺悟せず、單に文字を讀み、讀書に耽り、古來學問と云ふ通稱の俗にまねて、只だ一と通りの流行に摸倣するに過ぎずとせば、其の能く學問の實脈に接せんとは、望みがたし。一朝時勢轉ずれば、又忽ちにして學問なるものを輕蔑するの仲間とはなるべき也。

今や女學生の勉學心、朝の日の霞を破るが如く、春の花の蕾を開くが如く、滾の潮の充滿ちて推寄せ來るが如し、正に其の向上の首途に立てり。志あらんものは、篤と思慮して自から甚深の學味を眞實に喫せんとを心掛くべし。活識ある敎育

者は、此の機を巧みに捉らへて、眞平の好學心をかの女生の腹底に徹植すべし。

米國女史大學留學に望ある者

日本女學生の爲め米國婦人の創立に係る奬學金

右奬學金の委員は、第二回候補者を廣く募集せんとを欲して主旨書を配布せり。其の序文に曰く、

此奬學金は米國有志婦人の寄附せらるゝ所にして、實に日本女學生の高等教育の爲に設けられしもの也。曩に委員津田梅子米國滯留の砌、諸有志の同情を得て寄附金數千弗を受け、其利子を用ひて候補者を米國合衆國フヒラデルフヒヤ若くは其近傍の大學に留學せしむるとなれり。則ち明治廿五年十二月初めて此趣意を本邦各地に廣告し普ねく候補者を募り、競爭試驗を經て一人を撰定し直ちに米國に送れり、現に今まブリンモア女子大學にある松田道子これなり。今ま其第二回募集を爲す可き時機に際したれば、茲に候補者心得書を添て廣く有志を募ると云爾。

因に云ふ、前回試驗の問題は本誌第三百四十三號に見ゆ

家庭

上流今日の家庭

近年上流社會の家庭の腐敗は驚くばかり也。一々其の狀態を認ためんは筆の汚がれ也。名士立身の筋道を尋ねて、其の伎倆才力に由るの外何ものか莫る可らずと看取せらるゝもの自から存するあらん。試みに仔細に穿鑿せよ、一縷の忌はしき脈絡此方より彼方に傳はり、此の醜くき電線によつて出世の糸口の開かれ居るとを覺るならん。もし老人をして此を見せしめば嗟歎幾何ぞ。もし田舍人をして之を知らしめば驚愕何ほどぞ。竊かに之を見聞して三歎して止まず。

文明とは何ものぞ、いよ〳〵陋猥を助長するの謂ひ乎。開化は是か非か、人世の澆季何處に到りて止むとかと、心細き當惑の人豈し多かるべし。然し乍ら、文明の進歩は人智の進歩にして、善にも惡にも智を弄するとの彌よ巧妙となるにつけては、惡事の隨つて進歩せんとは到底免かる可らず。西洋諸

國などは、文明と誇り稱すれども、其の醜態の甚だしきとは、我國の比にあらず。左らば、我國の悪風は、尙ほ此上に增すとも減ずるとはあるまじなど思はるる理由もなきにあらず。單に心弱き方にのみ慮ばかれば、世は彌よ暗黒を增すと云ふの外あらざるべし。

左れど、悪の增す所には、同時に善增加して能く之を制裁し高潔の精神、他の陋猥を壓して其の跋扈するを防ぎてこそ、國家初めて維持せらるるとを得べし。西洋諸國に於ける實際の醜態は太甚しきとなれども、之と拮抗して能く之を支配するの善行も亦た盛んなればこそ、國家依然として成立し、而も其の地位を落さゝるとを得るなれ。左れば、只管らに世の澆季を歎ずるとを爲すのみにて之を壓倒するの氣慨なく、奮然として之を制し之を縛し之を改むるの精神なきに於ては、國家乃ち亡ぶるの外ある可らず。故に、世に悪あるを必らずしも怪しまず、但だ之に拮抗するの善乏しきを悲しむ。世上もし慨然として歎ずるものあらば、更に一たび奮つて大いに救濟の事に任ぜざる可らず。

抑そも、今の上流の多數は大率ね成り上り者にして、古への

六

武家町家などの堅實なる教訓を受ざりしもの也。一朝風雲に際會し、もしくは、奇怪なる電信に賴りて辛うじて出世すれども、其の鍛練、其の修業などは至つて薄弱なるもの也。ましてや、維新改革の動搖尙ほ止まず、總じて過渡變遷の折柄にて、万事の制裁極めて圖鹵なり。紳士、貴婦人などの氣質未だ定まらず、武家町人の理想とすべきものもなし。彼等が交際の卑陋にして醜劣ならんとは勢の免かれざる所なり。吾輩も曾て太甚しく彼等を嫌悪し、之を詰責して苟しくも容赦する所なかりしなれども、熟ら考ふれば、彼等皆な時勢の兒にして流行に伴隨するものに過ぎず、如此き處行に出でざれば當世を渡りがたしと觀じて、哀れにも世間並の附合に遷入り、久しうして其習慣に慣るると云ふ、眞とに氣の毒なるとにて、たとひ此等の伴隨者を責めたりとて、何の效もある可らず。勢ひ、大官上位など時めかして不義の醜態を演ずる輩儕をして力を失はしめざれば、他の小さき雜魚を如何んともする能はず。又先づ大勢を一變せしめ、社會の制裁を嚴かにし、規律を鞏固にして、士たり婦たり、官たり學たるものの品格を高標せしめざれば、則ち他の流行兒を一々に詰責すと

も何の効なかる可きとを知れり。

嗚呼、今の家庭は混沌たる境界に彷徨せり、暫らく天日を見ずして正に暗黒に入り、上流社會として他の羨望を受くべきほどの閨門に夜々涙あり、遺恨、他の野孃の邪氣なきを羨やんで、錦繍の褥に毒蛇の匍匐するを苦しむものも多かるべし左れど、思へ、上流の家斯の如くして豈に久しきを得んや、天下の家庭斯の如くして豈に安きを得んや。濁雲やゝ收まり、狂風少しく和ぎ、四面の塵大に定まりて、自から士君子の制裁なるものの熱せんと遠きにあらじ。其の遠からんと遠からざるとは、他なし、烈士の盡力と之に同情を寄するものとの足不足に之れ由る、惡行は常にあり、何んぞ之に懼れんや、只だ義人の聲の之に對して拮抗せざるを惜しむ。

儉約は口にすべからず

一家の安泰は儉約にあり、苟且にも此の手綱をゆるべなば、馬の狂奔して五車を覆がへすが如けん、古來、家を治むるに苦辛せしものに、此の心掛の切ならざりしものはあらざる也。

然し乍ら、玆に一つの用心ありと云ふは、主人たり主婦たるもの、妄りに儉約を口にすまじきとこれ也。儉約して一家の基礎の固くなるは、誰が聞きても祝する所には相違なけれど、眞實に之を悦ぶは先々、主人夫婦の外にあらざるべし。實際の子供にても、年長けぬうちは、生前一杯の酒に及かずの調子にて、將來に多く讓らるるよりは、目前の窮窟ならぬがよし、儉約々々の聲を耳にするは、餘り面白しとせざる所ならん。况してや、下女下男の奉公人に至りては、抑そも何を樂しみに此一日を送るべき乎。僅かの給金なりとも之を大枚のものと見做して之が爲めに忠を盡すの情もあるべけれども、主人の家に居心をよくして、万事を快ろよくし、納得して奉公せんとは、其の第一の所望なるべけれ。然るに、儉約の二字を紙に書かれて入口に張り出さるるは固より、朝夕屢ば儉約、儉約と說法せられて、耳にタコの入るやうに聞かせらるる時は、如何なる内氣のものと雖ども心中自から冷笑なきを得ず、眼前にかしこまりて、内心に不平をこぼし、また例の如く初まりしと言はん權幕の破裂は、何處に向つて現るべきや。面白からねば、茶碗の洗ひ樣もゾンザイとなり、米の

とざ方も粗末にして、薪に怨を寄せ、炭にくやしさを訴ふるなど、途方もなき鞭打の行はるるなるべし。斯の如くして一年の入用を計算すれば、知らざる所に空費せられたる物入は格外のものにて、倹約々々のふれ出しは全たく無効なりしを發見すべし。

此等の事を單に奉公人のみに限れりと思ふ可らず。田舎にては出入の人も多かるべし。都にては附合の人の多かるべし。此等の人に倹約々々の宣言の聞ゆること豈に利ならんや。聞くもの漸やく馬鹿にして、其の法外を笑ひ、絶えて其の倹約せざる可らざるの事由に同情を表せずして、反つて之を傷むるをもて一種の餘興とせんとす。左なくとも、斯る反情の爲に買ひ得べき損亡は莫大の事なり、差引したる計算豈に必ずしも利益なりとせんや。

寧ろ如かんや、倹約の二字は主人夫婦の口の内にとゞめ、腹の下にかくし、妙に人情の感應を味はひて、巧みに人の義心の根底を衝かんには。たとひ、下女下男の奉公人たりとも、もしよく感激せしむる所あらば、倹約の二字は彼等の口より唱揚せられて、存外の所に莫大の節用を見るに至るべし。これ人情微妙の作用なり。此等の事、もとより才覺に出づ可らず、主人夫婦至誠の本心より反映して、自から斯る照應の趣るように導びかざる可らず。其邊の工夫は非尋常の修養より由來することゆゑ、もとより筆紙に盡す可きにはあらず。但だよく自から修めて其道を自得するにある歟。

同伴者ありとの心地

春には花なかるべからず、世には情なかる可らず、旅には道づれなかるべからず、一世の行路に同伴の人なき寂寥は夫れ何をもてか慰さめんとはすらん。むかし俳人は山路に旅して道ばたのすみれに涙を落し、木の下かげに花の一夜をあかして夢に之と添伏しけり。情は人の實、一代の粋なり。之に滿足して悦喜のこゝちするほど樂しきはあるまじきなり。この故に詩人、伉儷の和らぎを歌ひて、同伴の睦みを説く。夫婦一生相ひ扶けて人界の行路を進む狀、眞にうるはしき哉。

左れど、半ば相背むき乍ら伴ふも同伴なれば、厄介苦勞に思ひ乍ら伴ふも亦た同伴なり。まことに能く心地よき同伴の實

を奏して、伉儷何處にあるも斷えず其の情愛の手を携へつつあるものは多きを得じ。

男子外に出でて事に當り、人情の曲折に會ひて冷淡なる取扱ひを受るときも、心中別に閨門ありて、ひそかに相慰さむるの同伴者之に隨ひつつあることを感ずるものこそ、多福なれ。疑がひ多き世の中に吾を信じて一身を托し、隱しだてのみの世の中に最も恥かしきことすら吾に打あけ、大和には男も女も多かるべきに只だ君にこそ許せと決して死を獻げて吾に伴ふものありと思ふは、如何なる賴ぞや。富と云はゞ之に越すべき富はなけん、滿足と言はば亦た之に越すべき滿足もなけん。男子心中の勇ましく、にぎはしく、心地よく、うれしき事、此時に於ける如きは太だ稀なり。

女こそ更に有がたかるべけれ。堂々たる一個の偉男子、其の心胸を開きて秘密を見めし、其の多情をまとめて一身に固め、壯快磊落なる雄々しき心に最と小き濃やかなる心附をこめ、其の節操を擧げて不束なるべき吾が一身に寄せ玉ふこそ、如何に忝けなきことぞ。人世の波瀾騷々しき御暇にも折々は思ひ出し、公事に奔走の忙しき旅の天にも吾家を顧りみ玉ふと考がふるなど、如何なる感謝ぞ。凡そ女と生れたる身にして此時の如くうれしき時はなかるべし。

伉儷同伴の趣味は斯る折柄にこそあるなれ。居を同にして朝夕相住ふに際しては、既に一躰の如くして彼我の區別を忘れんとやすらん、素より同伴てふ意識を感ずるほどの餘裕もあるまじ。但だ夫れ家を出でて客舍の月下に故鄕を懷ふの時、もしくは、簿書堆だかき裏に寸暇の休みをとり、忌はしき掛引の間だに人の情に思ひ到る時などにこそ、初めて吾に同伴する意中の人の誠を思ひ出すなれ。故に此の情の最も熾んなるを渠の失せ逝きし後に於てとす。斯る折には如何にか言ふらん、此事を聞かば如何に感じやすらんなど思ふよりして、其の好みしものを見るにつけ、其の手なれし事を思ふにつけ、同伴てふことの趣むきは最も切に知らるるなれ。

天に感謝す、人に記臆のこゝろの與へられて、うれしきことを忘れずに保存することの容易きや。此の心、苦しきことを念ひ起さする折もあれど、樂しきことを思ひ出さすることの亦多ければ、實に感謝すべき哉。

盗賊の防ぎ方

家は城郭なり、妻は城代の如し。戸じまり用心の心得、おろそかにては適ふまじ。茲に先づ、盗賊が人家を犯す工夫を示して、其の手段の驚くべき例をあぐ。皆實際家の懺悔より出しもの也。

◎藏を破る盗賊をムスメシと云ひ、破りて取るをクドクをしたと云ふ。功徳にもあるまじき也。之を破る場所は大概三ケ所なり。錠前を切ること、柱の間を破ること、屋根を抜く事、これ也。

錠前を切るにはボート錐にて穴をあけ、穴に細き錐を入れそれより縦横に切り開くなり。盗賊をするには音響を最も恐るるものゆゑ、音をたてぬやうの工夫を第一とす。大根を切口にあてて引くの法あり。入れる時には大根を引き、引く時には木を引くやうにして、破るなり。又、鬢付油を用ゆる法もあり。藏の戸前の板は大概五分位のもの故、容易く破ることを得べし。

柱の間を破り又は屋根を抜くに、矢張りボート錐を用ゆ。

まづ七分錐にて十箇の穴をあけ、其間を二三分づつ殘し置き、後に牛切庖丁にて衝切るなり。一尺角に兩方二十の穴を明けるに二時間にて充分なり。

窓の戸が明けてあれば、ヌリシロを見て壁の厚さを測り、又どの邊が柱にて柱の間がどの邊と云ふことを見究むることを得。又、窓よりのぞきて、中の品物を嗅き分けることも出來るなり。此藏には如何なるものが納れてあるか、絹布か木綿か、又其他の品か、大概、鼻にて嗅ぎ分けることを得。

◎又、シノビ、或は畧して、ノビと云ふ盗賊は、人々の寢靜まりし比を窺がひ家内に忍び込みて仕事をする也。人の家に忍ばんとする盗賊は、以前より時々其家の前を往來して篤と家内の樣子を伺ふ。中には、大家物持の家の圖取りを手に入れて、平生より委細に承知するもの多し。忍ぶ前には、心付くや否やを當てて見ることあり。之を仲間の言葉にて「ヅクカ、ヅカヌカ、アタツチミル」と云ふ。二つ三つ門の戸を輕く叩き、寢て居ぬや居やをためす也。若し咎めらるれば、「何町にはどう參りますか」とか、「天竺徳兵衛サンは此方ですか」ナド、出鱈目に途方もなき事を

尋ねて其場を胡魔化し、何の返事もなく、全たく寝込で居る様子なれば、直に這入りて仕事をする也。

女ばかりの時には、構はず押入るともあるものゆゑ、かゝる時には、たとへ女一人にても、アナタちよいと起て下さいなぞと氣轉をきかして、男子の居るらしく返事する家もあるなり。

いよ／＼人の家に這入らふとすれば、衝張棒や、掛金を外す位はまことに造作のないもので、衝張棒は一番仕舞の雨戸を腕で強く推し戸袋との間に右の手を入れらるるほどの隙をこさへ、手を入れて外し。掛金はさぐりとて、薄く延ばした金にて鈎のやうに拵へたるものを用ひて外づす。之にて面倒ならば、手の這入るほど雨戸を切ぬく。切れものに鬢付油をつければ、少しも音せず自由に切抜くと自由なり。

忍び入るに一つの困難なるは洋犬なるが、もし吠へられたらば、決して逃げてはいかぬ。只だじつと其前に立つて用意の握飯を喰ひ初める。洋犬は此方より手さへ出さねば決して向ふより咬みつくものにあらず。さすれば、悧巧なれども畜生のかなしさ、ツイ握飯の方に氣をとられ、自然と吠ゆるとを忘れ、羨まし氣に見つめて居るようになる、乃ち大概好い加減の頃を見計ひ、握り飯を投げ與へれば今度は尾を掉つて喜こび忽ち慣れ／＼しくなるゆゑ、之をだまして、かくれて這入るに造作なし。

◎又、明巣をねらひ、人の鳥渡の留守を見込みて、盗賊を働らくを、アキスフミ又は明巣狙ひと云ふ。

アキスフミに巧みなるものありて、常に一通の書狀と一包の菓子とを懐ろにし、物持と見れば直ちに入りて案内し、何屋何兵衛さんは此方ですかと問ふ。再三問ひて答へなければ、漸やく進みて坐敷に登り、物をぬすみて去る。万一見つけられれば、俄に語を設けて、私は何處より來れる小僧なり、主人より此の手紙と菓子とを、あなたに持參せよとの事ゆゑ參上せしに云々と云ふ。然るに、其の宛名もとより無き名にて間違ひ居るゆゑ、此處にてなしと言はれて氣の毒さうに輕忽を謝し悠然笑を含みて立去る。

家をあける人が、錠前さへ御せば大丈夫と思ひ居るらしきが、大概の錠前は、少し濕りたる手拭をかぶせ、右の手に

つかみて、ギツリと回せば、何の苦勞もなく、プッツリとちぎれるもの也。それより、爐の中、戸棚の內などを調べ、遠方に行きて久しく留守になりし家は、灰も堅く、飯櫃なども能く洗つてあり、日々他に出勤する人か、一寸と近所に用達しに出たのであるか、よく其邊を考へて仕事にかゝる。

留守に錠をかけて置くなどは、全たくむだの事なり。上手なものになれば、觀世より一本にてあけることの出來るほどのもの也。

又、大膽な仕事ではあれど、間數の五つ六つもある家ならば茶の間に人が居ても、坐敷に上りて仕事をすることもある也。話しに氣を取られて居るときは、少々がタ〳〵さしても誰か坐敷に居るのであらふ位に承知して少しも怪しまず、却つて仕事の爲しやすきもの也。

右の話を聞くものは、誰か盜賊の手段の巧妙なるに驚かざることを得べき。彼等は、泥棒が專門にて、日夜いのち掛にて其の工夫をつむことゆゑ、此外に幾多の新法を日に〳〵考へ出すこととなるべし。

左れば、尋常の事にては、迚も之を防がんとは難し。否な、どのやうなことをしても、這入らるる時には這入らるるならんと迄に思はるるなるべし。眞に夫程の巧者のものゆゑ、實は逃れやうもなき程に思はるる也。

左れど、初心の盜賊は、戸締の手落のみを見つけて這入るもの也。又、盜心なきものすら、家の貧苦に迫られ、物持の家の戸締の忘れてあるより、フト惡心を起すなどの事のあるものゆゑ、何れにせよ、戸締は嚴重にせざる可らず。之れ、自から守るのたしなみなり。次には、人に惡心を起させぬ慈悲なり。而して、夜々の締は決して奉公人に任す可らず、又外事に勞れたる良人の心を煩はす可らず、實に主婦なる人の責任なり。

又、老練せる大盜賊は平生人の家の樣子を承知し、其家族の心得方なども知り居るものゆゑ、情あつく慈悲心などある家には決して入ることなし。之れ、盜賊にも一種の義あれば也。夫にも關せず、這入らんとする大盜は防ぎやうなし、這入りし後は落付きて扱かふべし。但し、大方は平生の仁心にて豫じめ之を防ぐことを得、之を遠大なる泥棒よけとす。

講　義

氷の話

鴨村農夫

三伏の溽暑炎熱堪へ難きの時、一服の清涼劑や、一杯の茶頗る可なりと雖も、何ぞ一盞の冷氷あるに勝らんや。氷を賣るの家、氷を呼ぶの聲、之を聞き、彼を過ぎるだに、夏の外なる思ひすることそ、まことに氷の德とやいふべけれ。

冬に在りては、氷塊山をなし、氷面鏡をなすと雖も、たゞ凛烈の寒を威れて之を味はんとするもの稀れなり。然るに、夏に至りてや、一片の氷も、人見て忽ち食指を動し、食はざるに先づ清涼の氣を喜ぶ。氷の冬に於けるや嚴、其夏に於けるや慈、嚴は人の威るゝ所、慈は人の親しむ所、夏天炎溽にして人氷に親しむ、彼れ慈なるが故歟。

今日の暑き事よ、氷ならでは、道を行いて汗は膚を霑して喉いたく渇す、氷ならではと、いざと呼べは、オウと應へて、坐右直に氷盞あるは、蓋しこれ文明の餘澤にして、今日此頃の如くに、多量の製氷あり、都門邑里、人馬多く通ずる處には、之を鬻ぐの家あらざるなきは、實に近時二十餘年來の事なり。我國往古に在りても、夏日氷を愛せざるに非ず、史を案ずるに、

◎人皇第十七代仁德天皇の御宇に額田大中皇子、攝津の闘鷄野に狩獵し玉ひし折、皇子山上より野中を見そなはするに、廬の如きもの見ゆ、よりて使者をして視せしめ玉ひしに、使者還り報じて曰く窟なり。因て闘鷄稻置大山主を喚し、問ひて曰く、其野中に在るもの何ぞ、啓して曰く氷室なり、皇子の曰く其藏むるさまは如何、亦なにか用ふと。大山主答へて曰く、土を堀ると丈餘、草を以て其上を蓋ひ、敦く茅荻を敷きて、氷を取つて其上に置に、夏月を經て而して泮えず。熱月に當つて水酒に漬して之を用うと。皇子之を聞きて、即ち其氷を持ち來りて、御所に奉りしに、天皇之を歡びたまひ、これより以後、季冬に當る每に必す氷を納め、春分の始に至りて氷を散つなりと。仁德紀に見えたり。されば闘鷄野は氷室の始めにして、大山主は、夏日氷を用ゐる我邦最初の人か、然れども案ずるに、此より以前にも民間まゝ夏氷を愛するも

のありしより、氷室の制あるに至りしならんか。大山主は強ちに氷室を創めし人とも思はれず。

◎仁徳以後氷室を置かれしことと彼紀にも見えたるが如くにして、大寶の令、もしくは延喜式にも、其事見ゆ。然るに此時代は氷室の氷は天皇の供御、后妃、東宮、内親王、齋宮、妃、夫人、尙侍、上達部等に非らざれば用ふるとを許されざりしものにて、延喜式にのせたる式例に、氷室の氷を宮中に奉るに、四、五、六、七、八、九の六ヶ月を以てし、其中四、九の兩月は、天子の供御に奉つるのみなりしと見えたり。

◎延喜式に見えたる氷室の塲處は、山城國葛野郡德岡、同國愛宕郡栗栖野、氷野、土阪、堅木原、大和國山邊郡都介、河內國讃良郡讃良、近江國志賀郡部花、丹波國桑田郡池邊、以上各一所づゝなりしと見えたり。氷室はいづれも宮廷の御用の爲めのみなれば、みな都近う置かれて、東西七道にはたえてなかりしなり。

◎源氏物語蜻蛉の卷に、蓮の花ざかりの日、中宮にて御八講の佛事行はせられし折、人々氷（ひお物と書けり）を蓋物に入れて、わるとて持て騒ぐよし書き、枕草子にも、夏日金鋺に削りたる氷のいれるをあてやかなりと記したり。中古また氷室を詠じたる歌詠に乏しからず。

いにしへのつけのゝみかりそれよりや　氷室のおものたてはじめけん　中務

すべらきのみことの末しきえせれば　けふも氷室におものたつなり　俊頼

土さけててる日もしらず消もせぬ　氷室は夏の外にやあるらん　基俊

すべらぎのかしこき御代のしるしには　氷も夏のものとこそなれ　顯仲

かぎりあればふじのみ雪のきゆる日も　さゆる氷室の山の下芝　順德院

など、臣下のはいづれも、君によそへ、御代のためしに引きて、氷室を詠むなり、而して氷室は山の麓日かげかくしたる所を掘りて蕨のほどろをしきて冬氷を多く入れて埋みおけば夏までも消えぬなり。さて六月朔日に氷室の口を開きて氷を出し朝廷の供御に供す、あたり寒く、夏の外なるを疑ひ、日毎におものに參る意などをよむと敎へたるものなり。今もなほ歌よみならふに、此意にて氷室をよむとを敎ふるがあれど、今の氷室は、山にはあらで、市にあり、其構造さながら、世の常の藏にして、周圍は内外二重に板にて圍ひ、板と板との間は一尺ばかりも放す、其間に鋸屑をつめ藏の內外の空氣の

流通をふせぐ、天井もまた板を二重に張りて間に鋸屑をつむると同じ。氷の藏め方は、製氷地より冬期切り出したる大きなる角の氷塊を縣合せに積み上げ、鋸屑にて包み置くなり。されば今時のは、寧ろ氷藏と呼ぶべくして、氷室の雅趣なければ、其雅名もふさはしからずや。

◎さて今又歷史にかへりて、仁德延喜の朝を離るゝとも遠き鎌倉幕府にて、建長三年六月五日時の將軍、これまで富士山の雪を召寄せて珍物とせしは、民の費となりしと少からざるを以て、以後はぷき止めたるよし東鑑に見えたり。此等を案ずるに、古へは夏氷はこれ高貴の贅澤品にして、民間にはこれなかりしと見ゆ。下りて德川時代に至りては加州侯などより年々將軍へ氷を獻上するとありしも、上下共に氷室をつくり、冬氷を收めて、夏氷を愛せしためし多く聞えず。日本人の夏氷を愛して、放ち難くするもの、實に維新以後に在り。その事後に記すべし。

◎和歌にて、氷を詠むは冬の季のものなれども、氷室は夏の季なり。氷の雅言にひといふがあれど、こほりといふもやさし。又氷室田、氷室守の語あり。支那にては積氷を淩といひ、氷壯んなるを凍といひ、氷流るゝを凘といひ、氷解くるを泮といひ、氷柱を筋といひ、氷室を氷窖、淩陰、淩室などいふ。」

◎支那にてはいつの世より夏氷を愛せしか、知るべからざれども案ずるに、いと古き事なるべし。

◎唐の玄宗皇帝の寵妃楊貴妃の兄の楊國忠は奸獰にして、媚を朝士に納れて、知を結ばんとするに忙はしかりき。夏日に至れば、堅氷を取りて工人をして之を鏤めて鳳獸の形などを製らしめ、或は飾るに金鐶綵帶などを以てして、之を彫盤の中に置いて、王公大臣に贈與したりとぞ。然れど此時獨り彼の剛直の士張九齡は、此希代の贈與に預からざりしとぞ。楊氏の彼を畏れたればなるべし。

◎楊貴妃の初めて召されて、後宮に入らんとするや、別離に臨んで、其淚凍りて紅色の氷となりしとぞ。貴妃の淚は如何ばかり冷たかりけん、其紅なせるは、臙脂の附着せるにてやありけん。

◎氷を氷室に收むると支那には、いと古き昔よりありて、さる書には、氷を藏むる天子之を命じ、山人乃ち取る、山陰に採りて淩室に納む、其氷方に盛んなるとき、乃ち司寒の神を

祭ると見えたり。これによりて考ふるに、彼國にても、昔は夏氷は天子の供御、公卿の用料に供せしのみなりしならん、氷室は天子の令を俟つといふ思ふべし。また氷室に收め、また之を開くときに冬の神を祭りしものと見ゆ。而して朝廷氷室ありて夏氷供御に入りしもの、支那より傳はりて、我朝の習ひとなりしものならんか。

◎西洋にても古へより夏氷を愛せしなるべし。其需用の多々なるよりして、既に十八世の中頃に製氷器械を發明せし人あり。十九世紀の最初（千八百〇五年）にはチユードルといへる米國ボストン府の一商人、初めて氷を外國に輸出貿易せり。千八百三十三年に至りて、初めて亞米利加の天然氷は、印度カルカツタに輸出せられしが、其頃同國ベンガルには、既に器械を以て製氷に從事するものありしも、其價遠く亞米利加より輸入せられしもの丶二倍に値し、亞米利加のは一封度に付二ペンスなりしとぞ。

○米國は世界第一の氷塊輸出地にして、特に西印度、印度、支那に輸出する額甚だ夥しく、彼國に於ては、天然氷の伐採、圍入等は、冬期に於ける一大事業をなせり。ニユーヨーク市并に中央部州の氷の需要を供給する爲めに、諸會社每冬季の採氷額二百餘万噸に上り、ニユーヨーク市にて每年、之を使用するの高は、五十餘万噸の上に在りといふ。

◎米國にては、夏季にもなれば、每朝注文先の家々に氷塊を配達すると、恰も牛乳配達をなすが如く、人々は之を飲料に供し、また飲食物の貯藏に用ふ。

◎世人の氷を需要すると、歲々年々に增加し來り、天然氷既に其供給を充たすに足らずして、人造氷器械の發明あり。千七百五十五年にクーレンといへる米國の一醫師、製氷器械を發明せしを初めとし、其後此器械の異類續々として歐米諸國に於て發明せられ、パーキンス氏器械、ツウイング氏器械、ハリソン氏器械、シーブ氏器械、ゴツドレー及マツケー氏器械、ヴァン、デル、ヴェイデ氏器械、ジヨンストン氏及ホワイトロウ氏器械、カーレ氏器械、リース氏器械、クンプ氏器械、テリエル氏器械など其數いと少からず。

○此等の製氷器械の中既に我國に輸入されたるものありて、現に築地横濱に其製氷會社あり、六七年前大阪川口に同樣の會社ありしが、いまや無しとぞ。築地の製氷會社に於て使用

せる器械は、厚さ七八寸、巾、長二尺許の銅壺（銅壺といへども、鐵板のトタン引きしたるものといふ）を多く裝置したる一大槽ありて、槽中には鹽水を湛へ、銅壺の下方には、アンモニア液を通ずる數條の管ありて、管中の液は、器械の力によりて熱度を奪はれて極冷となり、延いて鹽水を冷却し、冷却されたる鹽水は、蒸氣力にて銅壺の上下左右を斷えず運轉して、銅壺中にいれたる淸水を冷結せしむ、其冷結に達する迄には、約四十時間を要すとぞ。淸水は玉川上水を使用せり。

◎また製氷器械にはアンモニア液の外に亞硫酸、エーテル等を使用するものあり。

◎抑も水は溫度氷點下まで冷却するとき、はじめて冷却するものにして、水の氷結せんとするや、膨脹を來たし、從つて比重を減ずるを以て、氷はまづ水の上面より結し始むるなり。彼製氷器械なるものも、要するに、氷結せしめんとする淸水をして、氷點以下の溫度に絕えず冷却するの裝置に外ならず。

（未完）

以下明治時代製氷の率先家中川嘉兵衛氏並に天然氷伐採天然氷產出地等に關する談話は次號誌上に載すべし。

文藝

小學生徒裁縫教授法新案

（小出新三郎氏新發明）

古來裁縫を敎授するには、師匠と弟子と二人づゝ、差向ひの風なりしが、小學校にて裁縫を敎授するに、生徒人數一組五十人、百人と多く、加ふるに授學時間僅少なれば、とても古來の敎授法を以てしては、程よく裁縫を習得せしむるとは難く、早晩何とか、新敎授方案の起るべきを希望するに際し、前栃木縣高等小學校裁縫科敎員小出新三郎氏は、其妻某氏と共に多年私宅に學校に裁縫を敎授するの傍ら、頗る敎授法の不完全なるに苦しんで、七八年來考案の末、やうやく一新法を案出して、既に栃木縣高等小學校に施して、成蹟大に見るべきものありしより、今般出京して、諸敎育家の批判を乞ひ、且つ多くの小學校裁縫科敎員の求めによりて、其新式敎授法を傳授すべしといふ。今同氏に就きて、其新案なるものを聞くに、多數生徒一時に容易に習得了解し得べき實物敎授

法にして今日の處、小學校にては、裁方、ヘラ付け（裁込）方等を教ふるも、塗板の上に白墨にて圖を畫く事とすれども、これにては、布の折り返し、裁ち切り等の事、抽象的なるに過ぎて、十二三歳の女兒の迚も十分に了解し得る處に非ず、また待ち針の留め方の如き最も必要なるものも、生徒一人ごとに教ふることとなれば、四十五分の授業時間にては、到底三十人以上にまはりきれず、爲めに其事のみにして、空しく一時間を費やすなど、不便此上なきなり。然るに小出氏の新案にては、衣類羽織等の裁方寸法を曲尺に引き直して、布もしくは紙の白墨の跡を拭ひ得るやうになしたるものにて雛形を調製し、これを特に裝置せる塗板の上に、横に鋲にて附着し、裁方及びヘラ付けの順序、待ち針の留め處、などをば教師自身に其雛形を動かしては、生徒に示し、生徒は從來の通り、半紙の縦半分に切りたるものを布幅となし、雛尺と、小出氏新案の鉛製ヘラとを以て教師の懸板上にてなすが儘を摸倣するなり。生徒等、教師のなす通りを寫したる後、教師は銘々を見廻りて、誤りたるものは、これを正すに、多くの時間を要せずとぞ。また縫ひ方に至りては、運針法として、最初に手加減を教へ、雜巾、襦袢等より進めて、一ツ身、三ツ身、など本式のものに入るに、其法、實際の寸法に適ひたる布にて、先づ區分縫ひをなさしむ。第一次は袖及び袖口かけの縫方を練習せしめ、其間に褄の縫方を練習せしめ、第二次には、先きに縫ひ上げたる袖を縦に半裁せしめて、半分を袖となし餘の半分を、假に身ごろとなして、袖付けを練習せしむ。第四次にはおくびつけ方、第五次には襟つけ方の練習をなさしめ、扨て全躰の出來上は雛尺にて雛形に縫ひ上げしむ。縫ひ方の練習は實際の丈の布を用ゐて、十分に針の運びに熟達せしむるを期するにありと。小出氏の此新案によれば、一週三時間にて高等小學四年間の裁縫授業にて、羽織まではどうかかうか着られるやうには縫ひ上げらるべしと。裁縫の巧者といふまでには多年の練習を要し、其上に人々の器用に在るとにて、此新案教授法の限りに非ず。此法は要するに十二三歳の小兒をして、裁縫術を了解練習せしむるに在るものなりとぞ。

現今の高等小學校の裁縫科目にては、多くは袴迄と規定したれ共、今日の教授法にては、袴處か、四年の稽古を積みたる生

徒が、課業上の暗誦は出來たりとも、實際布を採りて、さて寸法はと問はゞ、答へ得ぬもの多く。運針拙劣なるもの多しとの事にて、此弊を矯正し。又斯術を習得せしむるに當りて、小出氏の新案や。之を小學校に施して頗る可なるもの、如し。

案山子洒舍社點取會詠

（池袋清風大人評點）

大阪第一社

、更衣　　今村幸子

花に醉ひし蝴蝶の夢もさめ果てけさよりまとふ蟬の羽衣

評　詠者は蝴蝶と蟬とを上下に對せられたるべし此點は宜し然るに惜むべし實景に就て考ふるに蟬の羽衣は近代帷子とて麻衣や絹などの裏の見え透るばかり薄きの事なるべし是は維新前の衣制にては舊暦の端午より着るものにて首夏に更ふる木綿或は厚地の袷にはあらざるべしされど古代未開には首夏より今日の所謂帷子を着たりしやを知られば此詠を棄るには及ばさるべし

、同　　京都　永井鶴子

あかざりし花（春）のなごりの花衣（がされ）をしむかひなくぬきかへにけり（みながらにかふるけさかな）

夏衣はやたち（ぬひ）かへてたらちねは（古郷の母は）たへぬおもひに我をまつらん（や待渡る）

評　詠者は學校出身の人なれば女生など他郷の學校に寄寓し偶夏休に歸郷する故其位置に立て詠ぜし也たへぬ思とは苦慮する事也此處には過度也

、、薔薇　　大畠榮子

うばらのみなどとがむべき（誰かいふらん）人々の（皆）心も（に）とげの（は）ある世也けり（ならずや）

評　此題は重に花を賞する意也されど兎も角も題両斬新にて彼題を得ては直に古歌の作例を命さたのむ輩の詠すべき所にあらざる也此詠者は少女なれども我社の秀才なれば此位の詠は常に珍らしからず

、同　　垣田廉吉

夏くれば我やどの文よむ窓の明くれに風も（うばら）かをりて（風ぞゆかしき）うはら花さく

評　初五の意此處さばかり用なし又花さくよりも風が先にかをるやう也

、待子規　　堤鉦太郎

ふくるまで待こゝろみん（こよひはまたん）子規なくべき空のけしき也けり

、同　　池袋節子

時鳥來る（なく）べき頃となりしよりふけし月をもながめつる（くる夜半まで月を見）かな

わがごとく人もまつらん子規うの花垣にさす月を見て

、同　　今村幸子

子規初音たつねてむなしくも（きかんと山しろの）淀のわたり（堤）を行つもどりつ（きかへりつゝ）

評　たづれてさいひては既に或所に在るべきものを求むるやう也又下句は幾回も

波守の面倒否金鎚になるやう也又結句の辭つかひ稍狂歌じみたり

、麥秋　　垣田康吉

みのりつるひとつ（うつきさく山べに）黄色（ばむ）の麥畑は去年の雪間の緑ならずや（りけり）

、、同　　堤鉦太郎

ゆたかなる老るし（秋さへ）も見えて（せ）小山田の麥も（は）刈るべく成にける哉

評　秋さへと添削せしより面白くなれり即ち秋の稲田の豐熟の最也今年初夏の麥が豐熟せしを見れば秋の稲田も豐熟ならんと聯想する也

、、同　　池袋節子

昨日けふ麥は刈るべく成にけりひばりの雛も巣立そめけむ

評　下句麥秋の題にしては趣向斬新也大方の歌學者の古歌書の作例より引出したる類にはあらで實景よりよみ出たらん

賤の男が明日をたのみて刈のこす山田の麥生ゆふ日さす見ゆ

評　麥は雨ふれば刈る能はず明日をたのむは日入よくて明日の晴天を卜すれば也即ち初夏田上の晩景を畫きたる也

、同　　今村幸子

（蘆の屋）みしか夜の夢は水雞に破られて朝戸出すゞし麥の秋風

評　夢を破るとは漢詩には普通に用ふるも和歌には言ひなれず又麥生の秋などゝはいへど麥の秋風とはあまり聞かぬやう也されど評者は常に古來和歌の用辭の區域の狹隘なるを憂ふればなるべく之を擴めん事を望み古今歌人の未用ひざる詞をも苟も和歌の音調を妨げぬ限は漢語及外國語といへども用ひんと思へりまして日本語をやされば斯る調は新調として其左側に〇點を附すべし讀者宜しく注意すべし

、初子規　　垣田康吉

われひとり初音はやくも聞きにきと明日は（人に）ほこらん山子規

、同　　永井鶴子

かをりつゝ（むら雨に）桐の花ちる夕まぐれ一聲（初）高くなくほとゝぎす

評　初五にかをりつゝと出かけたる宜しからず初音の心さやかならず

、同　　大畠榮子

うの花を手折てかへる里の子にとひてや見まし（よ初音やきゝし山）初子規

評　是も題意に合はず尋子規也又歌に初子規とよみしは古歌にも稀也されどかゝる位の事は用ひて用辭の區域を擴めざるべからず

、同　　同人

子規きゝ（さやかには）しともなき（わかれ）一（子規）聲はこれぞまことの初音なりけん

評　然り子規は常に空高く飛行しつゝなくものなれば聲も判然せぬ事多し實景也而して却てかゝる初音は奥ゆかしく感ずる也

、同　　岡山　堤鉦太郎

さみだれ（むらさめ）のはれし垣ね（山べ）に月さへ（てり）て初音さやかになく子規

評　梅雨の晴し頃は舊暦六月初にて子規の時節は末也子規は舊四月中旬卯花のさく頃より鳴出して梅雨の初頃最也三十年前までは評者の郷里にては空の遠近に

晝夜の別なく騷がしきばかりになけり然るに京都に出れば案外也やがてよみし
二首は
都にてあまたの夏を經しかども
山子規一聲もきかず
ほとゝぎすいかなる音にてなくさだに
ふらぬ都の人のみぞ多き
さてある年舊六月より避暑の爲に日枝の山に登れば春の鶯夏の子規秋の蜩の三聲同時遠近に絶えずぶかして秋風立ては三聲皆止む亦奇也昨秋二十五年を經て故郷に歸れば子規甚稀也亦幼時天を仰きて叫びたる春雁、秋雁の行を見ずさては自然も亦年を經ては變遷するものにや人世の變遷する即ち自然にや

、同　　今村幸子

さみだれの雲間の月のかすかにも一聲もらすほとゝぎすかな

評　第三句にて上下を結ひたるは宜し唯初の心うすし

以上二十首

夏の雨　十雨言の中

上田秋成記
なにがし釋

夏のはやしの緑に染みますに、ゆふべを告ぐる鐘の音も、打しめるばかりに降るは、たもとすゞしき始なりけり。垣ねの花の雪ならばなどかしぼみくたすらん。

夏林の新緑、雨にあらはれて、鮮また鮮、人の暑を樹陰の夕風に拂ふて、梵鐘雨の脚をみだすをきく、初夏の納涼、正に此處にあり。卯の花の垣根に白く、時ならぬ雪かさまがふに、雪ならば消ぬべし、卯の花くたし五月雨のふる、あはれならずや。

みじか夜の月のあゆみ、いと速きやうなるに、小雨うちこぼしつゝ、ゆく雲のかゝれるよと見るに、時鳥の一聲鳴きすてて、又をち方に二聲三聲きこゆるもうれし。

夏の夜のあけやすき、さらでだにてる月の山端いそぎ、あゆみ速きかさうらめしきに、あまつさへゆく雲の、をり〳〵影をかくし、小雨さへそぼふる、いさあかず思ふ頃、何處より渡りけん、夢か現か、時鳥の一聲あはれに鳴いて過ぐるもの、遙に雲間に去りて、なほ二聲三聲なのるを聞きつゝ、袖ぬらす雨の繁は、ゆくものゝ留めし涙かさも忍ばる、その景色いはんかたなく面白く、この一文またさながら、さる景色あからさまに見ゆる心地ぞする。

田子のもすそのひぢりこにそみつき、苗とりはやす五月雨のはれ間のいそぎを、里つゞきに何とかや、うたひつるゝ、いとにぎはしな。

既に五月雨の頃の地にかく、天にはかくさ、あはれなるふし、うれしきふし、さりいでゝ書いたるが、扨てこのはれくもり定めなき空のあはれを、人の上にていはゞ、秋の實りの、いさ多かれさ神かけて祈りつゝ、あて人はやすらひして、一椀の茶、一面の碁に、徒然をやらんさすらん。田男は雨のはれ間〳〵を窺ひては、此處彼處さもに早苗植うるにいそがはし。手も足も泥にまみれて、勞苦いさ思ひやらるゝに、かれらはなれし業のうしさもせで、互に笑ひどよめき、可笑しき鄙歌をうたひたつるも、樂自から其中にあればなるべし。

野洲川。鈴鹿川などの岸の遠近に、明日や晴るゝと、心の外

の旅寐する人、いかにわびしからむ。

また此空に旅寐する人を見よ、西東旅に世渡る人はさもかくもあれ、やんごとなき事の爲めに望ましからぬ旅の空に心もとなさのみ忍ぶなるものゝ、ふりつゞく霖雨に、旅路の更にはかどらず。ましてや、川々水層のまして、空しく川邊の宿に日を送りつゝ、すざまじき水の面を眺めては、空の晴れがたく、日暮れがたきをうらやむは、如何にわびしき心なるらん。今の世には風雨の爲めに汽車不通などいふことありて、旅寐の心をなやますぞうき。まして我家にいそぐ旅人の、かゝる時のわびしさは、はたいかならん。馬孥が老いたる親、幼き見のあらむ人、あへて山川の遊歷を願ふべからずとの嘆きとも、かゝるなりにやいたく起りけらし。

水無月立ぬれば峰なす雲の、夕ごとにたつも崩るゝも、かたちあやしきは、天にますいづれの神のわざならん。蟬なく木かげの宿りは、汗をぬぐひ、岩間の清水をむすびて、あかぬ人の行きつかるゝさまなるに、風さと吹きくる跡より、黒き雲のおひしきて、降りくる村雨は、瓶に湛へし水をくつがへすが如し。

夏の雨のあはれなる、五月雨の空もさよりなれど、水無月の盛り、溽暑堪へがたきに、驟雨一來　頓に清凉を覺ゆる時、天地の景またいはん方なし。見よ夏雲奇峰多く、或は嵯峨たる千丈の嶺をなすかと見れば、俄然くだけて洋々の江河をなすが如し。雲霧龍變の奇、之を看るもの、誰か靄然として、神靈の異怪を感ぜざらんや。明日の命もしらぬ蟬の鳴き騒ぐ樹陰の清水に、道行く人の流るゝ汗を拭ひ、渇を醫して、その涼しさに、行つかれし身の、いつ立ちさらんずらん。折しも颯と吹き來る涼風一陣、黑雲を誘ひて、大きやかなる夕立の雨、水甕を覆へすが如くに降り來るに、雷さへそひて、實に夏の外の凉さあり。

みかうしおろせよ、たれよなど立さうぞきつゝ、見たまへれば、大庭のしらまなごは、忽ちいさら川の瀬に流れあひて、殿守の伴のみやつこの、こゝかしこの御垣のくま〴〵に遁ひかくるゝなど、いとめざましな。

風さへ添ひて夕立の雨のしぶき御階を洗ふに、大宮にては、殿守のとく格子下せよ、簾を垂れよと、立ち騒ぐも折柄の一興よと思ふに、白妙なせる庭の眞砂の、やがて瀧津瀬なす流の底となるもをかしく、仕丁等の雨にそほぢ、庭の川瀬に堰かれて、くま〴〵にをかしげなる顔して隱るゝもまた興あり。これ等九重の景。轉じて山間の谿流を尋れんに、

落たぎつ瀬の水上には、しらぬ濁の岩ほを越え、岸をくづしつゝ、みかさまさると見しも、たゞ片時にながれ落ちて、水陰草の露おもげになん、ふしなびきあひたる、今朝よりの暑さ忘るべき夕なりけり。

谿間の細流、此雨に俄に水層を增して、混々濁々岩を越え、岸を壞ち、滔々の勢當るべからず、いとすざまし。然るにこの壯觀も暫くの間にうせさりて、流はもとの涓々潺々たるに歸し、すさまじき夕立の名殘りは、水邊の草の葉の露の涼しき風に散りて、ま晝の暑さいと堪へがたかりしも、頓に忘らるゝ心地することそ、夏の日の命ともいふべけれ。

＊　＊　＊　＊　＊

此文章は、十雨言とて四季の雨の景色を述べたるものゝ中を一とくだり拔穡にしたるものなれば、完璧を缺くの恨みあれど、今の折柄なれば、殊更にその夏の雨の觀のみ、かくはとり出でゝ拙き評釋を加へたるにぞ。

問答

財産を安全にする事

に付きて問を寄せらるる人のありて曰はるるに。左程多くありと申すには候はねど。中々の苦心にて貯蓄せし若干の財産を如何にして置かば最も安全ならんかと。色々思案に沈み居候、心得べき節々教示ありたし云々との大意なり。

答に云く

先づ利の多きものは危險にて、利の少なきものは安全なること、古今の通法ゆゑ、苟しくも産を安固にせんことを望むものは、苟且にも、利の多からんことを願はず、只だ手堅くして變化のなきものを撰び、薄利なりとも大丈夫何日迄も多少づつの收入あるものに定めて、其利に手をつけず、利に利を積んで久しうして巨額に上ることを心得べし。之れ第一の規則なり。

扨て、之に付きて、目下の事情に考へ合せ、何如なる種類の事に産を托すべきかと云ふに、矢張り、地所山林などを買ひ置くに及くことなかるべし。

公債は確かなるやうなれど、明治政府近年の經濟は、言はば一家大切の場合にて、此上餘程の仕方を立てざれば、隨分心配多き次第にあれば。國に盡す奉公は又別の事として、一家の財産を堅固にする元入には、只今の處ろ、公債もあまり安心の出來ぬもの也。

確かなる鐵道の株券は、株の中にては先々望みの確かなるもの也。何れにせよ、天下の大道となるべき鐵道の收入が、之より年々殖えることも減ることのあらん筈なければ、其の株は先以て安心なるやうなれども、政府の公債すら多少心配すべき今日の時世に際しては。只だ社員の手に任せて營業せしめべき私立會社の株は、如何なるか變化に出で合はんことなしとも言はず。矢張り同樣に心配多きもの也。

右二つの掛念はあまり心配すです杞憂の如くなれど、近時經濟界の大勢と、明治政府の末路とも唱ふべき時機に近づきたる現況より申すことにて、蓋し之よりいよいよ國家の難時に臨むべき場合ゆゑ、堅固なるものをと問はるれば、先々此の二種類をも心配の中に算入せざる可らず。

之に反し地所、山林などは、天災と云ふ掛念もあれど、之は天爲にて致し方なし、暫らく念頭外に置かざる可らず。人世の區域内にては、今の時最も大丈夫、且つ最も有望なるもの、之に及くはなかるべしと信ぜらる。

地所の產物は、開化のお蔭にて段々取實を增すやうになるとも、減ることはなし。產物の直段も追々に高くなる計りなり。米などの相場は、漸次に上るべし。又、地所の價の上らんとも論をまたず。此後、大抵、地租の上げらるゝ塲合は來るべけれど、地租の上りし丈は、何れ產物の直にひゞき、相當の償の立つものゆゑ、大躰に於ては心配なし。

山林は殊とに望あるもの也。材木の欠乏は年々に夥たゞしきことにて、電信柱、諸建築、船艦の增造等、文明の進步につれて、材木の入用は增す計りなるに、輸出も又追々增加し來る。ましてや、西洋の家屋建築に木材を用ゆるやうになるべき大勢いよ〳〵明らか也。木材の入用は年を追ふて增すべし。日本の土地は、三分の二は山ゆゑ、山林の輸出は日本の名物となるべし。

ことに、山林はあまり手の入らぬものにて、年々知らぬ間に大きくなるゆゑ、一家永遠の身代として遺すなどには、屈强のもの也。

左れば、方今の處、最も安全なる財產の置き塲と言へば、必ずや、地所山林などにあるべしとは被存候也。

史傳

齊彬公と西郷南洲

如雲散士

◎北村紫山の『西郷南洲』が出版せられて、隨分評判がある樣だ。文章に氣骨あると、英雄を崇重する工合は、此人の得意で、少しも浮薄な所がない、讀んで眞に面白く且つ爽快に感ぜられる。

◎然し、水戸の烈公又は藤田東湖などとの關係を叙する邊に至ると、依然たる在來舊套の觀察で、別に新しい着眼が見えぬ。況んや水戸派の論者で、水戸には緣故あつき方ゆゑ自然

左樣に見らるるやうに成るも無理はないが、紫山の爲には頗る惜しむヿである。

◎東湖との關係に就ての在來の逸話は、眞僞が疑はれる程だ。『西郷隆盛傳』の著者たる勝田君なども其說の樣に聞える。凡そ當年一世に喝采せられたる東湖先生の事ゆゑ、西郷氏が之と一二度會はれたと云ふても、隨分種々の評判が起つたであらうし、東湖先生のお弟子などは、大得意で色々言ひ傳へたであらう。之は今日でも實際よくある話です。「先輩には東湖先生を推し、同輩には左內を推す」と云ふ例の逸話も何だか分りはしません。西郷先生が例のお世辭かも知れない。

◎安政の大疑獄起るの前、所謂る繼嗣問題で八釜しい比に、西郷先生は西京より江戸へかけ數度往來し、又鹿兒島にも度々還りて、何だか此の問題に付き餘程盡力せられた樣に見える。又天祥院殿の手にたよりて、奥へ意見を通じ、一ッ橋殿を立てるヿに大層盡力したやうにも見える。現に其邊の事を書いた南洲先生の手紙も殘つて居る。此等によりて、先生を水戸派の味方のやうに認ため、隨つて之は齊彬公の意旨を受けて働いた樣に論ずるは、決して無理ではない。併し之は總て平凡の觀察で、大人の度量を見拔かない話だと思はれる。

◎齊彬公は、我藩には吉之助一人ありと言はれた程で、隨分南洲先生を重く見られたに相違ない。之を「お庭番」にして、屢ば直接にあひ、色々訓諭せられたに相違ない。併し公がコレラ病に罹つて忽然頓死せられし以前に於ては、未だ西郷氏を重く用ひられしヿはなかつたと見える。之は、西郷先生を重んじられなかつた故でなく、甚だ重んじられた柄である。」

◎齊彬公が曾て吉之助の人物を賞められた時に、或人が問ふた、夫では何故もつとお用ゐになりませんかと。公の答へに、夫は宜しくない、人物と云ふものは早く用ゐるものでない、之を用ゐる爲に色々の害も起つてくるものだからと。即ち其の才を老ならしむるの主旨で、眞誠に人を用ゐる名君の雅量です。

◎夫れ故、安政の頃、南洲が京大坂江戸の邊に出て、大層盡力したらしく見える時でも、決して齊彬公の大計畫の意旨を承はつたなどの事はない。南洲は屢ば叱られて色々と教訓されたさうで、言はば師弟の關係であつたのです。三千の精兵を率ゐて齊彬公が最後の手段を執られるなどの言ひ觸らしは、

爲にする所があつたらしい、決して眞面目の話であるまい。
◎齊彬公は阿部伊勢守などによく言はれたさうだ。水戸の隱居はアー言ふ八釜しい議論をする人だから、さう思つて扱へば宜しい、万一の事があらふとも、私が引受ますと言ふて、殆んど呑んで仕舞つて居られたらしい。中々尊王攘夷どころではなかつたと見えて、開國黨から見ても其の親方のやうにあり、鎖國黨から見ても、其の味方のやうに見えたらしい。其間に御自身はどうしたかと言ふに、鹿兒島に色々の製造所を起し、紡績も、ビイドロも、製鐵も、種々の軍器も皆な製造させて、之も各藩に賣付け、大儲をしやうと云ふ計畫で、同時に、琉球に於て大に海外貿易をしやうとせられたが、某親方と云ふが中々の尊王家で、切腹して之に反對した位だ。夫が丁度、精兵三千を率ゐて西京に出づるなどの評判の立られた比だとすれば、眞の消息が少しく窺はれる。
◎西郷先生は曾て言はれた。凡そ何か世に吹聽したいと思ふたらば、人に向つて斯樣に話せ。之は極秘密の事ですが、アナタ丈に申しますから決して人に言ふて下さるなと、斯う話すと、其人が又其次にさう話して、廣告したよりも廣く擴るものだと。

◎西郷先生の赤誠に兼て、此邊の大機變の有たとを思ふときは、先生が極めて大切な事を手紙に書いて、春嶽公などに呈したと云ふのは、少し一考してから受取なければ、先生の本旨に反くと思はれる。天璋院殿は齊彬公の娘分であつて、元來一橋は嫌ひだ、將軍が一橋を嫌ひなさるとも、天璋院には分つて居つたと見える。然るに薩摩派が、一橋に反對し、水戸派に反對するとあつては、無益の騷を募らせる計りである。其邊の微妙の人情も亦固より齊彬公や西郷氏の慮られた所であらう。表面、慶喜殿を立てるとに贊成された如く見えるは、確に此邊の筋路に由るに違ひない。
◎もとより此等の事がどちらであつても、今となつて八釜しく辨ずる丈の價値はないが、齊彬公にせよ、南洲氏にせよ、凡そ俊傑たり大人たりし人の度量胸中が、どのやうに複雜であつたかの工合を示すは、何時の世にも緊要なとであらうと思はれるから、夫を示す爲に少しく辨じたのである。

隨感

○懷疑を飾るものあり

大いに疑ふは是れ大いに信ずるの基なれば、人の一度び疑境に沈むことのあらんなど、決して懼るべきことにあらず。寧ろ此際、其の疑ふことの輕薄にして、骨を動かすことの淺小ならんを憂ひとする也。近來往々曖昧の放談を爲し、人生尤とも緊要の一大事を等閑に附し乍ら、區々の議論に誇り、もつて自から懷疑と稱して心中稍や高しとするものあり。此如きは、其心中眞に已むを得ざるの疑ひあるにもあらず、たゞ眞面目の誠實なきが爲に、克己復禮して嚴に自から制すること能はざるの横着を飾るに、區々の議論を以てするのみ。余は常に此等の輩儕に語る。君もし疑はば何ぞ大に疑はざる、人生根本の大事未だ決了せずば、如何んぞ何の爲に營々役々とはする。君もし是非善惡を疑はば、余が其の頭上に向つて唾するをも憤ることある可らず。何ぞ君大暗黒の中の大悪魔となつて、身を火炎の中に投ずるほどの懷疑なきやと。多少の名聞は之を好み、多少の利達は之を求め、多少の美衣飽食は之を欲して、而して曰く人世是か非か定めがたしと。乞ふ先づ人世と言ふこと莫れ、其心に既に是とする所のものあるべければ、則ち先づ此を是として滿悦せよ。是れ當坐に於ける君に相當の分度のみと。

○某子の墓に題す

某子來り學ぶこと久しからずして逝けり、靜淑道を好みて多く語らざりき、而して余をして熟知し惆悵の恨思無限ならしむる者存せり。嗚呼、紅苞微しく咲て早く散り、人をして長く花影を念ぜしむ、若し今在らば標韻夫れ奈何ん。空しく墓畔に立て唯だ無量壽に因て慰藉せしむ。

○眞面目の衝突

一藝に達し一道を貫いたる程の人の衷心に、尋常輕淺の徒の窺ひ知らざる誠實眞面目あり。他人之を見れば融通自在とも思はんほどの出來事に仲々煩悶し、人の攻めざるに憂ひ、人

の要めざるに供へて、曾て安き思ひのあるとなし。是れ實に大悟徹底の素因にあらずや。初めより横着、初めより圖太、初めより氣樂にして、而して能く眞の平安に達するものは、未曾てあらざる也。

○誤解は人の事のみならず

情なき誤解、つれなき待遇、手を翻へすの敵對など、世は眞に味氣なき人の苦勞の爲替場なるらし。恰も其のもつれに罹りて心の憂ひ遣る瀬なき人より觀ずれば、凡そ人間の賴みなき、交はりの果敢なき、何故に斯は太甚しきとかと今更の如く驚かるるならんと雖も、仔細に思ひて一度省れば、我も亦た同樣の人間たるとを免れざるを覺らん。そもや、人生に對する吾が觀念、天地に對する我が信仰などの幾度か變遷せし。今日の悟りは、昨日の誤解を知らすれど、明日の覺りの今日の誤りを知らせんやうなし。斯て常に小智をもて圖り、暴りに才覺して隨意に攝理を許す。元來微賤なる本我自己が、天を畏れず地を重んぜずして樣々の輕き評釋を爲し、屢ば之に敬意を失するにたくらぶれば、吾に對する世の人の待遇の

當を得ざるなどは物の數ならず。夫れ何の誇る所ありて斯る要求を他に向つて施すの權利ある。

○うるさし、うるさし

吾が家に小さき猫を飼へるに、初めは少しく珍しかりしが、暫くして、うるさきと言はん方なし。世話しき時にも、ぢやれつき、淸き器の邊りをも汚し、暑さに苦しき尋の端をむくろしくし、ニャン〱と泣きつゞけて、屢ば淸き默想を破る。吾が家に小さき子あり、彼等も亦た、之をうるさしとて、數たび叱りこらし、之を擲けば、反つて戯むれと思ひて引かき、放り出せば、宙返りして見せるなど、殆んど如何んともしがたし。左れど、猫をうるさしと言ふ子等も中々に余が讀書作文の爲にはうるさきと多けれど、彼等は毫も之を知らずして只だ猫を計り責むるなるべし。猫と子等とに向つて大人らしく眉に皺よせなどする吾も亦た、何ものにかうるさしと言われつつあらんなれど、自から今ま知るよしもなし。

○福翁及若翁

一概に拜金宗のあだ名を取られしこともある三田の老先生は、先頃、元勳政治家に對して『腹を切らざれば坊主となるべし』と勸告せり。マンチエスター派の利己主義經濟論者と囃されたる鼎軒若翁は、近頃、大臣たるものが借金もせずして、反つて金を溜める卑劣を罵り、政治家が黃金を輕んぜざることを責めたり。夫れ經濟の極旨は、金をまをけることにあらざるは言ふ迄もなし。此の二氏の如き別に主張ありて時として斯る立論を爲せしこともありつれど、其の眞面目の追々世に知らるゝに至るは賀すべし。

○名醫は神に視る

古來の名醫は扁鵲に及くものなしと言ひ傳ふ。魏の文侯或る時、扁鵲に問ひて曰く、君が兄弟三人のうち、誰か最も善く醫を爲すと。扁鵲答ふらく、長兄病を看るや其の神を視る、未だ形跡あらざるに早く之を除くをもて、其名、家の外にすら聞ゆることなし。中兄の病を治するは、毫毛に入り、其の根本を癒やす、故に其名や、聞ゆれども一地方より出でず。扁鵲の如きは、血脈を鑱り、毒藥を投じ、肌膚の間に副ふて之を治するをもて、處法花々しく、名、諸侯に迄で聞ゆるなりと。夫れ、未だ起らざるに防ぐものは、其名なし。其の根底に衝くものは、名高からず。人目皆な見るの所に手を下すに及んで人喝采す。此をもつて、醫治に於て名の大に聞ゆるものは抑も末なり。たとへば、政治に於て國の病を治する、宗敎に於て人心の病を治する、皆な齊しく然り。

雜錄

あはれ老嫗

有美 記

涙あり血あるの人、よろしく之を聽くべし。靈氣はいま地にあり、慈仁は人の心を離れず、時に應じ事に臨みて其尊躰を顯じ給ふ。人よ、末世末法の時代來れりと世をはかなむをやめよ。多情多涙の畏友 某、身を獻じて人類のために盡さんとし、意溢れて遂に朝鮮行となる。この人、過る月 某 の夜牀

に發せんとして新橋にあり、暫く入口の戸扉にもたれて、別れを銀坐の街燈に惜み居れば、八十に近き一人の老嫗、耳も遠く足も自由には動かぬほどなるが、時は過ぎたるには非ずやと、若き婦人に扶けられつゝ、急ぎ石段を昇り來りしが、憐れや、身の動き自在ならねば、二三段にして頓びぬ。漸くにして場内に入りたれど、その淋しげなるさま、憐れとも〳〵いふべき樣なし。友茲に於てか近よりて詳にきけば、武豐まで孫を尋ねて獨旅行せんものなりといふ。よし我これを介抱して大府まで至り、武豐線に轉乘せしめん。途中の用にもと、杖はなき乎竹はなき乎と尋ね廻はれど、發するまでたゞ五分を殘すのみなれば、街に出でゝ之を求むるべきにもあらず、既にベルさへ高く鳴りたれば止むなしと、老嫗を扶け抱きて改札口を通り、烟と共に暗黑のうちにつゝまれ去りしが、數日ならずして書は來れり。途中のこと果して如何なりしか、之を奇絶といふも、涙の種なれ。ありがたさかたじけなさ筆には盡きじ。

……………征游の第一信は先づ例の失敗談………君子なれば過ちを再びせずと申せども、塵俗の悲さ一擧一動にも

悔ゆべきことの數々あるぞなさけなき。然し新橋にて拾ひたるお婆さんは、劬はり扶けて安全に大府まで仝行し、同地より武豐線の客車に轉乘せしめ、一葉の紙片に『この婆さんは、憂き世の浪に漂ひて、寡餘孤獨の旅行をなすもの、弱を扶け老を劬はるは、人類共通の常道なり。何卒適當の保護を與へて、宛名の地にまで御屆被下たし』と認めたるを與へ、武豐に、降車して驛員若くは警官に渡さば、惡くは計ふまじと云ひ含めて、時間なければ、生は匆々にして彼の客車を辭し、我車に還る間もなく、一聲の笛聲は轔々の響きと共に雲山迢々の間に入れり。此點には別段の失敗なければ御省慮の程を願ふ。杖は途中にて得る能はざりしを以て、乘降には手を曳くも緩漫なれば、終にはオンブにすることにし、嗽盥の水を求むる如きは、彼を動さずして生自ら其勞に抵りたれば、杖なきも左程の不自由は感じ申さゞりき。……………………彼女の無邪氣なるは實に可笑可憐のものにて、最初は頻りに氣の毒がりしも、生が『親疎の關係を離れ、人類と觀ずれば、弱を扶け老を劬はるは、當然の道なり。我もし御身の孫なら

ば子ならば如何』と説けるを了解せるものか、半夜は生が包みに凭れ、生が膝を枕に假寢の夢安らかなるの様の、如何に罪なくして小供らしかりしか。斯して靜岡にて嗽ぎ手水して朝餉を取れり。彼は一折の辨當を食するに堪へざればとて、半ば喫して他は丁寧に保存し置けり。豊橋につけるは、八時卅分。彼ははや空腹を訴へ、曩の剩餘ありしを忘れて、亦もや辨當を購はんとするなど、可笑しきこと云ふばかりなし。是よりは生の失敗談なり。蒲郡を發して岡崎に至らんとす。禿山矮樹乾燥無味なる風景より轉じて竹林亭々茅屋點々、村娘の裾赤く、田夫が脂下りの煙暖かなる光景の面白さ、車中安座の眺に堪ふる能はず、帽を冠りたるまゝにて、頭を窓外に出すや遲し、飄然たる猛風は會釋もなく、アナヤと叫ぶ一刹那、帽は叢に隠れて車輪は既に數町を轉ぜり。無殘！あれには我と婆さんと二枚の切符を入れありしものをと、暫しは茫然煙の行く方を眺め居りしが、今は詮なしと度胸をきめて、坐に戻れば列車はまさに岡崎に停まれり。生は婆さんに理由を告げて共に降車せんことを乞ひしに、彼は莞爾として一握りの銅貨を示せり。車室を出でゝ先づ婆さんを待合所に入れ、直に生だけは手荷物を受取り、驛長に面して事實を語りたるに『それは氣の毒なり、當方にて探しやるもよけれども、斯くては夕方にならん、急に要するならば、足下自身に捜索するに如かず。併し若し其にても見えざれば、鐵道の規則なり、發車驛よりの賃金を負擔するの覺悟なかるべからず』と。生乃ち言に從ひ、彼女の保護を驛員に托して、元と來し道を探り辿れり。蒲郡と岡崎間道程九哩其の中央とすれば、四哩半を逆行せざるを得ず、屢々之を路人に問ふて、遂に其落失せる塲所に至りしも、何者かの拾取る所となりて得ず、失望悄然踵を回らして岡崎に還る。途すがら決心せり『此上は是非なし、老人は性急のものなれば、彼れをば先づ次の列車にて武豊に輸るべし。二人が新橋より岡崎までの乘車賃四圓二十錢と、彼女が大府までの拾何錢とを合すれば、我が嚢は已に底を拂はん。然る時は進退これ谷まるなり。不得止彼れに此處に別れて、獨り岡崎に殘り、善後の策を盡すべしと。歸りて之を驛員に告げしに、驛の役員に二人の青年あり。深く余の境遇に同情を表し、亦婆さ

んに對する余の行爲に感ぜるとかにて、役人輩には珍しく……………………………………(その好意により)再び婆さんは同乘して大府に至り、名古屋にて急行列車に接續するを得たり。……………………………顧て婆さんは如何にせしかと、待せ置ける待合室に入れば、彼は待ち草臥れて何處に行けるにや、影だにもなし。遙かに見る街の彼方に發束なく歩みつゝあるを。危しと見る間に彼は石に躓きて轉輾せり。生は奔り行きて扶け起し、何の用ありて、出で來れるかと問ひしに、彼は退屈に堪へず、街に出でゝ、うどんを喫せりと。盛もよく價も廉に味もよければ、二椀を喫して歸り來れるも、餘りの殘り惜しさにイマ一椀を食ひに歸らんとするなりき。而して彼れは何のために、生が、退屈する程までに彼を待たしめて、往復九哩の熱砂を履めるかを知らざるものゝ如く、莞爾として豊橋より同乘せる三娘子の美麗なりしをたゝへ、自己の衣服を顧て、頻りに其の汚穢を嘆ち、生が接近して同情するの如何に嫌厭に堪へざるべきやを謝せり。これ何等の無邪氣………………。あゝ！想ふ、今や老媼何處にか、その力なき頭をもたれて眠る。武豊の愛孫、よく之を助り扶くること、その友の如きや如何に。

悲歌

花影子

ふしおもしろく　歌ひつゝ
あはす櫓音も　いさましく
浦のつり舟　漕ぎいでぬ
沖にゆふ日の　落つるとき

こがねを碎く　海原に
消えゆく舟を　見おくりて
かへる妻子の　五六人
明日の望みを　たのしみつ

窓の戸たゝく　雨の音に
たのしきものも　さまされて
波のどよみに　胸さわぎ
思ひはまよふ　波のうへ

思ひはまよふ　波のうへ
狂へるあらし　しづまりて
うれひをふくむ　朝のそら
沖よりかへる　ものとては
くだくる波の　ほかぞなき

燈火ほそく　ふくる夜に
眠りもやらぬ　妻や子の
こゝろ知りてや　秋の雨
いとしめやかに　ふりそめぬ

つゝめども隱れぬものは夏虫の
身よりあまれるおもひなりけり

京都婦人の迷信

此頃の明教新誌に見えたる大川生の『三日の京都』なる旅行記中下寺町太子堂世繼地藏に歸依する婦人の迷信の一斑を記したり。左に拔萃す。

京都下寺町の太子堂白毫寺に詣づれば、寺內に世繼地藏と云へるあり、都人の信仰篤く子なきは孕み、子多きものは此に預けて懷姙せざるなりとぞ。參詣する婦人は十七八歳の少娘より三十六七歳までの細君のみ、晝夜絕えずとぞ聞きては効驗の欺かざるものなるを知りぬべし。堂の前後には驚くべき程に祈願の貼紙多し、その二三を寫さば、

一寸御願申ます私の子は今年酉の二月五日生の女の子でござります御地藏樣よろしきところへ御せわ下されます樣に御りやくを下されます樣に御願申ます又もろてやろとの御心なれば町ところは此御寺に賴んでござりまするゆゑ御たづね下されよろしく御賴み申候。　巳の歳四十歳女

御地藏樣へおそれながら御願申上候私事ひんくに暮しなんとう致居候に付たゞ今にん身相成候ては實にこまり入候に付何卒こゝ五六年間にんしんには相成申さぬ樣御助被下度一重に御願申上候　二十三歳女

私事ふたおやのゆるさぬ男と一しよになり身おもくなりこまりますゆゑどうぞしんぱいをさつして人にしれませぬ内にながれまするように賴み申候。　卯の年十九歳女

酉の年の女どうぞ一月に男の子出來まするよう御願申上ます。

巳の年廿九歳の女何卒何卒三月には男の子おとひで御さづけ下され度な無ちぞう樣。

まごころをぼさつに願ふなり
　なにとぞわこをさづけたまへと　當年三十一歳男廿七女
信心にまことがあればやさりくる
　入るも入らぬも願ふその身に　十七歳男
十年間御あづけを御願申上候　西村むめ廿六

森有禮の婚姻證書

明治八年故森有禮の其妻と婚するや、大久保一翁、福澤諭吉兩人を證人として婚儀を擧げ、且つ契約證書を作る其文面左の如し。如此き事に出でしもの先是森氏米國に留學して、頗る彼風儀に心醉するの致せし處なり。これ實に我朝に於ける破天荒の異事たりしなり。然るにこの兩人天壽長く全からずして、覆水盆に歸へらざるに至りしこそあはれなれ。

現今十九年八月の齡に達したる靜岡縣士族、廣瀨阿常、同廿七年八月鹿兒島士族森有禮、各其親の承諾を得て互に夫婦の約をなし、今日即ち紀元二千五百三十五年二月六日、即今東京府知事職に在る大久保一翁の面前に於て婚式を行ひ約を爲し、双方の親戚朋友と共に之を公認して、玆に婚姻の約條を定むること左の如し

第一條　自今以後森有禮は廣瀬阿常を其妻とし、廣瀬阿常は森有禮を其夫となす事

第二條　爲約の双方存命して此約束を廢棄せざる間は共に餘念なく相敬し相愛して夫婦の道を守ること

第三條　有禮阿常夫婦の共有し又共有すべき品に付いては、双方同意の上ならでは他人と貸借或は賣買の約を爲さゞること

右に掲ぐる所の約束を爲し、一方犯すに於ては他の一方之を官に訴へ相當の公裁を願ふとを得べし

紀元二千五百三十五年二月六日　東京に於て　森　有　禮
廣　瀬　阿　常
證　人　福　澤　諭　吉

◎女界文壇雜爼　六月中朔

◎家庭への注文(淸水直義)	家庭新聞第三號
◎眞宗宗徒家庭の中心	傳道新誌第十年第六號
◎女子と佛教(青山茂子)	傳燈第百四十四號
◎女子論(續)(佐藤叔治)	心海第四十六號
◎婦人矯風會の事業(松村介石)	婦人新報第二號
◎婦人の職分(山路彌吉)	同
◎女子大學の設立と宗教	明教新誌六月二十日同二十四日
◎小兒心理學(元良博士)	女子の友第一號
◎女子教育(野口保興)	同
◎詩想と女子(三輪田眞佐子)	同
◎女子教育に就て(齋木文夫)	同
◎英女皇即位六十年の大佳節(英人チヤモレー)	
◎青樓を全廢すへし	國民の友第三百五十三、四號
◎英國女皇雜話	弘前新聞六月廿二日廿三日
◎女子教育に就て(師岡のぶ)	時事新報六月廿六日廿七日
◎ウイラード女史日本に來遊せんとす(パリツシユ女史)	芙蓉峯第十五號
◎理想的家庭(高杉榮次郎)	ジヤパンエヴアンゼリスト第九號 基督教新聞第七百二十三號
◎養子の害を論す(三好退藏)	太陽第三年第十三號

時　文

◎西鄕南洲　北村紫山著　春陽堂版

本書は、本號史傳欄に論評せり。

◎英文青山叢書　第一集　松島剛編　同

松島氏は目今英文教科書の適良なるものなしと憂へて、英文青山叢書なるものを編纂せり。其第一編を見るに、主として十九世紀の文豪並に偉人の散文韻文雜れ收め、加ふるに日本に關する英文二三をも録めたり、文章の區域は地理歷史の興味ある書き方なるを主としたるもの丶如し。中學校等の英文教科書としては、至極適當なるべし、

◎威海衞海戰記　平田骨仙編　同

威海衞の海戰は、万國海戰史中の最大壯觀なり。曩に黄海海戰記を物したる骨仙平田氏また經營苦心の威海衞海戰記の編述ありて、久しく讀賣新事紙上に見えしもの、今や一册子となりて出版せらる。此海戰記や通常の日淸戰記とは異なり敍事の中に談話を交へ、興味從つて多く、且つ其詳密なるとは、實戰境に在りし人々の證明する處なれはいふまでもなし。

◎新小說第二年第七卷　春陽堂版

『結婚』今野愚公が露國ゴーゴリの結婚の滑稽劇を飜譯したるものにして筆鋒いと熟妙輕滑にして、讀者をして面白味を覺えしむると多し。

『嗚呼廣丙號』は美妙齋主人の藤木海軍少尉なる人に會して、廣丙號沈沒當時の遭難の實話を聞き文面白くものしたるものなり。

『放蕩師獅馬廻丸』この滑稽小說筆頗る輕妙にして、著者が手管のコツを話す處など書き方中々に凡ならず、讀むべし。この外柳川春葉作尾崎紅葉閱『命中々々』などあり。

(◎)南美人　杜著作　春陽堂版

◎兩美人　弦齋作　春陽堂版

佐賀の擾亂に民黨の巨魁人の爲めに殺され、其妹兄の仇を討ちたる後、同名の女子非業に斃れたるを利として其名を冒して、東京に遁れ、彼非運の女子の叔父の家に養はれて、其心根の正しく美しきを以て頗る愛せらる。然るに彼死せりと思ふ女子の蘇生して叔父を尋ね來りしがこの者の心奸なるが爲め、彼美人は遂に其罪蹟の發見して、十有五年獄裡の人となりて、而して何某といふ軍人之に十五年後を約すといふ筋、弦齋の小說は、いつもながら、非常に人情ある人と、非常に人情なき人との二種の行爲より成立ち、其寫す處小說元來架空と雖も、此の人小說の如くに架空なるはなかるべし。此小說また其架空の甚だしきものゝ一。

◎大策士　櫻痴居士作　同

春陽堂新に紅葉山人の監督の下に、春陽文庫なるものを發行し、其第一編は櫻痴居士の『大策士』なり。居士は滑稽皮肉の筆を以て現今政治社會の所謂策士なるものゝ內情を寫す。所謂策士とは居士の描くが如きものや否やを知られども此小說について讀む處にては、其猾手段、籠絡手段、金儲手段より其失敗を來たすの點まで、かゝる社會に通じたる居士のことゝて、いと巧みに面白くものせられたり。

◎女子の友　第一號

兼て噂ありし『女子の友』なる一婦人雜誌は、高等師範學校出身の石川正作氏の編輯に成りて、東洋社より出づ。其體裁『女鑑』よりも無乃、既に絕刊となりし『大和心』に髣髴たり。編むる處有益讀むべきの文章多し、此雜誌に就ては、茗溪會派の贊成者多きを見受けたれば、今後之によりて同派の女學意見を窺ふを得べきか。吾人は此好雜誌を良友として得たるを喜ぶ。

未讀○片輪車◎新小說第二年第八卷

片々

◎日本女子大學と佛教　明教新誌記者は日本女子大學校の大坂に設置せられんとするを見て、焉んぞ之を祝し且つ賀せざるを得んや、女子教育は最も宗教的感化に依らざる可らざるが故に女子大學には必ず純然たる宗教の一科程を設置すべきを希望すべきを希望す、然して其宗教が佛教たらんことを希望すといへり。

◎然るに　前號にも紹介したる『女鑑』齋木某の日本女子大學校に反對するの論は、完結に入るに從つて、いよ〳〵其耶蘇教と關涉する處あるべしとの點に偏見を挾んで、毒言を逞うするあり、結語に曰く女子大學設立論者は‥‥深夜人定まりし後、滿腔の野心を退け憂心忡々女子の學程を想像せば、豈に思ひ半ばに過ぐるとなからんやと。

◎眞言宗　は今年度制定の宗典に於て明治十九年度の宗制の懲戒條例章中に、一俗服を着用し蓄髮を爲し、又は寺門に葷肉を入れ、若くは女人を寄宿せしむる者は、擯海清行に處すとの明文ありしを削除したり、世上の新聞紙はこの事を以て眞言宗妻帶の禁を解きたるものとなす。さる明言こそなけれ、事實或は然らん。

◎墮胎獎勵　とは、日本人近刊號に見えたる誰曾居主人の說なり。曰く墮落は禁ずべきことに非ず、之を禁ずるは唯母の生命に危害あるを恐るゝが爲めのみ、若し危害なき墮胎法發明せらるゝに至らば、墮胎は寧ろ之を獎勵するを可とすべし、墮落は貧家の家計上に必要なり、胎內三四ヶ月の子を殺す、敢て無慈悲といふべきに非ずと。

◎詩想と女子　三輪田女史曰くおのれは詩想なば女子の生活に應用せんといふも決して異調の文人墨客に變化せよとにあらず、また世俗の所謂、歌をよみ、詩を作るに及ばざるも、一國の人民として、一家の主婦として高雅の生活をなせよとこそいふなれ。即ち良人に對して貞なるは、松柏の操に比すべく、小兒を薫陶するは、春陽の德に類するなど、總て天然の道を踐む女子とならまほしう望むものは、おのれの所謂詩想を養ひてよ、詩を學ばざれば、言ふなきなりと、孔子も曰はれきと。これ美育の粋をいふものなり、女史また其女子教育一班にて美育を論

す、女史の見地や常に俗流を拔いて高し。

◎臺灣臺北城內諸營業者數　六月十五日調査臺北城內諸營業者の數を聞くに料理屋內地人二十八戸、土人二戸、飲食店十七戸、藝妓六十八名、獸肉營業者六名仝請賣者十一名仝行商一名、雇人口入業者一名、古物商二名、烟火販賣者一名、鍼灸術者一名、定寄席二戸、駕籠營業一名、駕籠營業舁夫十九名、人力車營業內地人二十五名、土人二十九名、仝挽子內地人二十五名、土人三十八名、旅人宿二十二戸、湯屋九戸、質屋十一戸、賣藥商二戸、遊戲場一戸、回漕業二戸なりと。

◎同上臺北地方（城內、艋舺、大稻程共）內地人商業種類　二十九年十二月臺北縣廳の調査によれば

雜貨二四五、時計八、製靴九、陶器一、生糸一、印肉二、貿易四、硝子二、書籍四、寫眞一一、日本酒八四、洋酒七八、味噌一九、醬油三一、酢三、鹽三、米及雜穀二〇、茶七、砂糖三、和洋服裁縫一六、洗濯業一四、理髮一五、湯屋一三、宿屋五二、質屋一〇、古物商一、古着五、彫刻五、活石版印刷業七、菓子五五、烟草一八、食料品一五、農產物種子三、水產物一二、林產物一、樟腦三六、回漕業三〇、使役業一、土木建築業七、木材九二、鐵物金物四〇、瓶磚土管二二、石炭コークス薪炭五、金物細工二五、諸器械四、家具一〇、疊製造三、石油三四、ラムネ製造七、商品賣買周旋二、雇人口入業二、貸家一、貸座敷一八、飲食料理店一〇九、生肉店五、遊藝一五、遊戲場一二、計一二八一、なりと云ふ。

◎夏季流行の髮飾　時事新報に見えたるに、

丸髷の夫人奧樣達は櫛笄とも象牙の對にて芝山の細工淡泊なるを喜び、白襟、紋附着たる儀式の席にも象牙は當世風なりとて、木鼈甲最上のものと尉び通るよし價は五圓以上三十圓迄。

令孃向の櫛は政子形象牙の生地に花鳥の透し彫り、牡丹の高彫りなど好みにて價七圓半、之に白魚形の中差對を好むときは價十五圓內外なり。

御新造孃さんにて、夏向き島田、丸髷の重きを厭ひ、假りに銀杏返しに結ぶ者は古代積形桐の差櫛を持囃せり、蒔繪は一葉、一草、野分など淡泊としたるもの多し。櫛の價三圓半、中差對なれば六圓半。

商家の內儀にて柘植の木地に好みの蒔繪したる櫛笄を用ふる者あり。是等は最も新規を趁ひ、意匠の詮議に屈托する人々なるべし。價四圓五十錢以上十二三圓迄總・て近年一般の流行は御殿風と稱へて蒔繪、鼈甲、銀造りを專一とし、木地類には見向きもやらず。又工夫する者も無かりしに、機一轉して昨年の夏より木地こそ當世風と賞美するに至りたるもをかし。

後ろ挿は艷消し縞なし無地の瑪瑙六分玉に、烏鐵松葉足のもの大流行にて、價は四五圓より、最上二十圓位迄なり。是は若向きにて金無垢の足、珊瑚の玉を嫌味なりとする贅澤界の好みなりとかや。又年齡三十以上にて質素一方の世帶持ちと云ふ向きは、同じ造りに玉は四分半の好み多し。根掛は寶石入りの管掛、眞珠の類廢れて瑪瑙の三分玉流行せり價は十圓以上なりとのこと。

◎英國女皇の　即位の當時に用ゐられし寶冠は價十一万一千磅にしく、重量二封度、寶石の數三千個餘、內二千五百個は金剛石なりといふ。

◎空瓶中　に遺書を封じて、三光丸の破船によりての、非常の最期を報じたる女子あり、眞人の試驗落第を悲しんで、自殺を謀りたるものあり。

◎米國女ヱ 六學　に留學を志願する日本女子の爲めに、先年津田梅子女史等奬學金を募りて、明治二十五年志願者競爭試驗を明治女學校に開きて、松田道子氏ブリンモーア女子大學に留學することなりしが、本年は其第二回募集期に際して、遠からず第二の候補決定せられんとす。有志の女學生奮つて之に應ずべし。其規則は時報欄內を見よ。

◎養子の害　三好退藏氏養子の害を論じたる餘、曰く嗚呼世の夫婦子なきもの何ぞ養子の外、別に其家名財產を安全に保護するの方を思はざるや、又何ぞ眼を開いて歐米各國を達觀し、其國民が財產を擧げて、公益事業の資本に供し、名を後世に垂れ、德を千載に遺すもののあるに傚はざるやと。

時報

◎文部省の女子夏期講習會

文部省にては是迄每年、尋常師範學校、中學校または高等女學校の爲、夏期講習會を開設したるが、その講習員なるものは、いづれも皆男子のみに限れりしかば、本年よりは特に女子の爲めに講習を開かんとて、全國より尋常師範學校、高等女學校などの女教員を集め、來る八月二日より、凡そ二週間、女子高等師範學校に於て家事衛生に關する講習ありといふ。其の講師は、醫學博士三宅秀氏なりといふ。

◎山口高等女學校改革

山口には先に尋常師範學校女子部の設けありしも、明治二十五年の議會は、一時之れを廢止したりしが其後復興せらるべくなく、また高等女學校の現存するもの

のあるも、萎靡不振の形勢にて、有志中之が改革を思ふものなきにしもあらざりしが、未だ其運に至らず。然るに同縣師範學校長河原信朝氏は頗る此事に留意し、先日師範學校々長會議の爲、上京したる節、種々之に關する運動をなしたる結果、該女學校を擧げて舊藩主毛利家の管理に歸し、毛利安子老夫人の老後の餘業さすることなり、同家よりは、基本金として二万圓を支出すべく、而して學科は本科豫備科又は專科位に止め、師範科養蠶科杯は廢止となし、校長は學務課長に兼任せしめ、有力なる敎頭を置き、從來の掛持敎員は一切之を廢し維持費は基金利子千圓、授業料七百圓の收入にて充つる計畫なりといふ。之が爲、同縣第三課長渡邊氏は細目打ち合せの爲、近々上京すべしといふ。

◎諸女學校の卒業式

●同志社女學校卒業式　は六月二十四日同志社公會堂に於て擧行せられ、敎頭松田政泰氏の卒業小史、卒業生總代牛田子の告別の辭、三好退藏氏の卒業生への告辭、等ありしとぞ。專門科卒業論文題は師範科牛田たき子の平安朝文學、文學科不破祐子の平安朝の閨秀文學なり。卒業生は專門科甲種師範科牛田たき子、同乙種文學科不破祐子、普通科、岩崎留子、磯谷榮子、原雪子、西尾米子、谷村閑子、玉置眞峰子、中野壽子、秋山寅子、木村綾野子、小林眞子計十二名あり。

●同志社看病婦學校卒業式　は六月廿六日同校大廣間にて擧行せられ、卒業生は六名。

●宮城女學校卒業式　は六月廿九日擧行せられ、卒業は布施てる子、吉田てる子の兩名にして、吉田子の英語文章朗讀、布施子の邦語文章朗讀、同縣知事の祝辭等ありたり。

◎貞婦　土佐國安藝郡田野村生れ當時山田町住松田鐵太郎(四十三)は妻丑（三十一）と共に、此の四五年以前高知に來たり、働き居し內、三年前より鐵太郎は脫疽病に罹り、諸所の醫師に療治を受け、養生中女房丑は僅かに髮結をして、手厚く夫の看病をなす而已ならず、藥餌の世話等は實に能く行屆きしが、不幸にも鐵太郎は心臟病を併發して、六月中旬死亡せしより、直ちに原籍へ通知せしに、身寄の者は何分長々病氣にて、とても錢金もあるまじ、死軀の取片付けも六ッヶ敷事と思ひ、其用意をなして來りしに、丑は親族の前へ五十圓の金を差出し、死軀は原籍へ引取り。跡の佛の祭り方は何卒私に營ませて吳と賴しより、親族一同も、始終の事を聞き、涙をこぼして感ぜしと云ふ。(土佐新聞)

◎實業熱心の女子　義捐金を集めて一大軍艦を造らんと目論む婦人あれば爰に又實業熱心の女子あり。其人は神奈川縣都築郡新田村祖澤きく(四十八)とて家に數万の財產を有し、長男は帝國大學校を卒業し、通常の人なれば氣樂に日を送るを樂しむ處なれども、一意實業に奔走するより、知己親族より屢々意見さるゝも、一向平氣にて實業氣狂とまで綽名さるゝに至れり。同女の希望は鮭漁を以て有名なる北米の產地より、各漁業家製造餘の鮭の頭、腸骨等の如き廢棄物を拾收して、我國農家の肥料に充つる考へにて、曾て其家僕たりし某の桑港にあるを幸ひ、旣に桑港領事の手を經て同國政府に出願したれば、遠からず認可あるべしと非常に勇み居ると云ふが、右の計畫に付きては京濱有力の實業家同女の熱心に感し、其名義を出願書に借し與へたりと云ふ。

◎淑德婦人會　鹿兒島市易居町不斷光院にては、今度標題の如き婦人會を組織したり。其主旨とする處專ら婦德を修め傍ら女子に最も必要なる禮式を修養せしむるにある由にて、每月陰曆廿四五の兩夜に法話を說法すといふ。尤も女禮式の敎授には日曜每に鶴嶺女學校の敎師なる某女史を聘して敎授する筈なるが、法話の參聽は會員外若くは何宗派の人にても苦しからずとのことなりと。

◎北海道女子講習會　北海道敎育會にて、裁縫作法家事音樂講習の目的を以て開設する女子講習會は、去月十四日札幌女子小學校內に於て開始したり。講習會員は初日までの申込三十九名に達したりといふ。

◎赤坂愛敬女學校　は四日中生徒總數五十三名に達し、敎員數は十名なりといふ。日蓮宗僧侶堀內氏が昨年五月の設立にかゝるものなり。

◎仙臺市女子高等學校　は四月上旬、仙臺市南町通りに開校せられたり。敎頭には豫て女子敎育上に熟練なる師岡(吉田)のぶ氏を東京より聘し、生徒の數目下百數十名、猶申込あるも、敎場狹くして、新築落成までは、入學を許すと能はず、止むを得ずして謝絕する程なりといふ。

◎福音同盟會來會者饗應　東京地方基督敎會婦人會は聯合し其委員を撰出して、今度福音同盟會の東京に於て開會せられしを機とし、各地方よりの來會委員諸氏を、七月二日東京靑年會館に於て饗應したり。

◎遊藝學校　新橋にては、先頃より花月、瓢屋が發起で、東會と云ふを設け、此處へ每朝各遊藝の師匠が出張し、恰かも學校で敎師が多くの生徒へ敎授する樣に、大勢の藝者を並べコミで敎へ居るが、葭町でも新橋に負けぬ氣を出し、近々東會の如き遊藝學校を設けんとて目下相談中なるよし。

◎海外女界

◎ケンブリッヂ大學女子に學位を與へざるに決す　英國ケンブリッヂ大學評議員會にては、此程六百六十二に對する千七百十三の多數を以て、女子に學位を與へざるに決したり。此評議をなすの際多數の男子評議員會場の前に群集して、會場の向ふに短袴を穿ちて自轉車に乘れる婦人の戱畫を貼するものあれば、また一大旗の婦人を惡口する語を書したるを樹つるものあり、而して絕えず叫んで、女子に學位を與ふるを否みたりといふ。

◎女子大學生　墺國に於ては文部省令を以て、本年十月一日より女子をして、大學哲學科の聽講を得せしむることゝなりたるが、醫學科に於ても醫科大學の制度を改革するに際しては、女子に聽講を許すことゝなるべしと云ふ。

◎一夫人の遺產　米國ウイスコンシン州ベロイト市の故ジョン、エイチ、フレンチ夫人は遺產の內三万弗を諸慈善事業の爲めに寄附すべしと遺言したりとなん。

◎一夫人の寄附十八万七千弗　猶太人にて巨万の富を有せる男爵ヒルシュ夫人は此程十八万七千弗を支出して、かの大火の悲慘に陷りたる巴里大慈善會の目的たる救[illegible]の爲めに寄附したり。

◎印度に二婦人病院新設せられんとす　印度カシュメーアのマハラジャーは英國女皇陛下即位六十年紀念の爲め、スリンガ幷にジャンプーの二處に各一の婦人病院を新設して、之には女子の醫師のみを採用せんとせり。

◎ヘレン、ケレル孃新約克圖書館盲人部長たらんとす　今般二百五十万弗の資本金を以て米國新約克に新設せられんとする公立圖書館にては、盲啞の奇才ヘレン、ケレル孃を擧げて、盲人部監督長たらしめんとすと。

◎那威婦人禁酒會　にては種々運動の結果、政府をして、ラム酒販賣者は、自己の妻より以外の婦人をして、其商業に分役せしむると能はずとの法律を發せしめたり。

◎希臘に女子義勇兵起る　倫敦デーリーメール通信員の報ずる處に據れば、同通信員は希臘兵に從軍中カラヴアッサラに於て、彼の國民同盟と稱する義勇兵の制服を着して、不規則軍隊に投ぜる一個の婦人あるを見たりと云ふ。而して、同通信員は更に附記し曰く此婦人は雅典に於て裕に暮らせる醫師の娘にして、戰場に於ける男子の擧動歯痒きものあるを見て、今は女子の起つべき時なりと信じ此に至りたるものなりと。

米國婦人の創立にかゝる
日本女學生奬學金候補者心得

第一條　此奬學金は、米國婦人の厚意により、日本女學生の爲に特に設けたるものにて、將來日本の女子高等教育普及の爲め、相應の盡力を爲さんとする有志婦人の志業を助くるを旨とす。故に之が候補となりて幸に及第し、定期の學年を彼地の大學に送らんものは、卒業の後必らず之に酬ゆるの精神あるべく、歸朝後、日本の婦人の爲に其學力を利用し婦人の位置を高尙にするとを目的とせざる可らず。故に、米國在學中品行方正なるは勿論、居常其責任を忘れず、必ず志業を遂げ、奬譽ある生涯を送る可きを覺悟すべし。

第二條　奬學金は米國委員の所有に屬し、其高八千弗にして、此利子を奬學に用ゆる者なれば、年々の支給四百弗乃至五百弗とす。之を以て留學中の食料及授業料（ブレンマー大學に於ては年三百七十五弗）を支拂ふに足るの見込なれば旅費及び衣服料雜費（每年凡二百弗）を自給せざる可らず。又夏期休業中は別に百弗の入費を要すべけれど、事業に從事して其幾分を減ずるとを得べし。

第三條　米國の委員は生徒の學業を監督するのみならず、生徒をして米國の社會及家政を實地に見聞せしめ、基督敎的開化の眞面目を實驗せしむるを務む。故に米國在學中、生徒は万事該委員の指揮に從ふべし。

第四條　每五年に候補者を募り受金者を定め、五年間米國に留學せしむ。內一年は豫備の爲に設置し英語及他の硏究に從事せしめ、他の四年間は大學に入學せしむ。大學は米國委員に於て左の三學校を撰び置き、尙ほ生徒の志望に應じて委員協議の上其一を撰ばしむ

ブレンマー女子大學　ペンシルバニア女子醫學校　ドレキセル學醫學校

第五條　候補者は、十七年以上三十年以下の獨身者にして、身体健全なるものに限る

第六條　候補者は、明治三十年九月三十日迄に當事務所へ左の諸書付を差出さるべし

奬學金候補者願書。　履歷書。　醫師保證狀。
其學力品行才能等に關する敎師の保證狀。
其の精神學術等を表證すべき文章を隨意添送あれ

願　書　書　式

私義今般日本女學生の爲め米國婦人の設立に係る奬學金候補者と相成度存候に付御規則に從ひ御試驗願度御撰定に預り候はゞ充分精神を盡し委員諸君の御期望に應ずべく存候

年　月　日　　何國市町村誰娘又姉妹
　　　　　　　姓　　名

奬學金日本委員御中

（右願書には東京に住居する身元正しき人の保證を要す）

第七條　試驗は東京及地方に於て、來る十月十一日の交、同日、同問題を用ひて執行す。

第八條　受驗者は受驗の節金一圓を納むべし。

第九條　試驗科目は左の如し、
國語
漢學

毎月二回三日十八日發刊

女子の友

都合ニ依リ**初號**六月二十二日**發刊**

定價 一冊前金八錢六冊前金四拾六錢 十二冊前金九拾錢全國無遞送料 郵便切手代用一割増但五厘切手ニ限

目次

●**口繪** 福地帝國圖案社主考證溝口帝國博物館技手畫 鮮麗優美なる紫式部肖像のバレンズリ彩色畫

●**祝詞** 秋月女子高等師範學校長○谷本高等師範學校教授○岩谷東京府高等女學校長○阿保高等師範校講師○下田華族女學校學監○跡見女學校長

●**女子の友** 發刊の趣旨○女子の教育（野口女子高等師範學校教授○詩想と女子（三輪田眞佐子）

●**家庭** 衣食住（敲玉女史）○作法（佐方女子師範學校教諭）○活花（田邊和氣子

●**史談** 紫式部（田邊友三郎）○附口繪考證

●**學藝** 花月草紙講義（坂華族女學校教授）○江島用傳源禪師韻（土屋華族女學校教授）蚊の話（子子生）

●**童話** 花子（樋口高等師範學校助教諭）

●**教育** 小兒心理學（元良文學博士）

●**小說** 時樂（ひとつば女史）妻の鑑（甘泉澪標）鮮麗なる挿畫を添ふ

●**漫錄文園雜報**

發行所 東京本郷元町一丁目三番地 **東洋社**

●**大賣捌所** 東京神田區表神保町 東京堂 / 東京京橋區銀座町 北隆館 / 東京京橋區尾張町 東海堂

●本誌發刊につき特に賛成を表せられたる諸君左の如し（姓名いろは順）

女子高等師範學校教授 岩川友太郎
東京府高等女學校長 岩谷英太郎
高等師範學校教諭 生駒萬治
華族女學校教授 坂正臣
華族女學校長 細川潤二郎
女子高等師範學校教授 大久保介壽
女子高等師範學校講師 奥好義
女子高等師範學校教授 加藤錦子
高等師範學校長 嘉納治五郎
女子高等師範學校教授 田中敬一
高等師範學校訓導 田邊友三郎
東京女學館教授 田邊わけ子
高等師範學校教授 谷本富
東京女學館長 辻新次
華族女學校教授 土屋弘

女子高等師範學校教授 中川謙次郎
女子高等師範學校教授 野口保興
富山縣尋常師範學校長 桑原譲一
女子高等師範學校 矢田部順子
帝國圖案社主 福地復一
帝國博物館 小杉榲邨
音樂學校助教授 小山作之助
音樂學校教授 幸田延子
女子高等師範學校教諭 後閑菊野子
女子高等師範學校訓導 合原琴子
女子高等師範學校長 秋月新太郎
華族女學校教授 淺岡一
高等師範學校講師 阿保友二郎
跡見女學校長 跡見花蹊
華族女學校教授 佐野安

女子高等師範學校教諭 佐方鎭子
文部省學校衛生主事 三島通良
女子高等師範學校講師 三輪義方
東京女學館教授 水谷直孝
東京府高等女學校教授 三輪田まさ子
女子高等師範學校教授 篠田利英
女子高等師範學校教諭 新莊義之
華族女學校學監 下田歌子
女子高等師範學校保姆 清水鶴子
高等師範學校助教諭 樋口勘二郎
帝國大學教授 元良勇二郎
東京府有馬小學校長 森田勝
東京府尋常師範學校教諭 角谷源之助
臺灣國語學校教諭 鈴木光愛

鈴木弘恭先生述

文法口授

定價十二錢 郵税二錢

日本女學

定價四錢 郵税二錢

巖本善治著 **吾黨の女子教育** 定價四錢 郵税二錢 女學雜誌社

社會雜誌

六月十五日發行
第三號要目

◎定價一部十錢郵税五厘　○六册前金郵税共六十錢
見本は郵券十一錢を要す、爲換振込麴町郵便局本誌は
前金に非れば、一切發送せず

發賣元　東京麴町區下六番町六番地
社會雜誌社發賣所

日本歴史
數學（英語若くは日本語にて答ふるを得）
算數學、代數學、
英語（Irving's Sketch book; Johnson's Rasselas; Tennyson's Enoch Arden に類する英文を用ゆ。）
理科（地文學 植物學 化學 物理學 生理學）此の中一を擇び英語若しくは日本語にて答ふるを得

右諸科目の内英語を除く外の問題は、尋常師範學校卒業の學力を標準として提出す

左の科目は受驗者の望みにより參考のため試驗することあるべし。
佛語　獨逸語　羅典語　平面幾何　立體幾何　三角術
米國史（英語）　英國史（英語）

第十條　候補者の學力は各科試驗の平均點數に依り定むると雖も、國語教育は今後習練せしむるの機會少きを以て、殊に之に重きを置くものとす。英語は渡米後入學し得るの學力を以て程度と定む。且候補者は參考科中成るべく受驗するを得策なりとす。

第十一條　試驗は、受驗者の已に學び得たる知識を試むるのみを目的とせず、其德性才能をも試むるものなれは、成るべく其心得にて答ふべし。

第十二條　英語の試驗は、英文和譯、和文英譯、英文作文等なり。

第十三條　試驗の結果は本年内に各受驗者に報告すべし。

第十四條　受奬學金者は明三十一年夏渡米し、同九月學業を始むる見込なり。

第十五條　其他何事にても質問あるときは郵券二錢を添へ事務所へ問答すべし。

東京　下二番町二十六番地津田内　奬學金事務所

日本委員

巖本善治
岡見けい子
加藤きん子
添田壽一
（委員長）津田むめ子
瓜生しげ子
生田三郎
元良勇二郎

米國委員

Mrs. Matthew Baird(Chaiman)
Mrs. Wistar Morris.
Miss Frances Bennett.
Mrs. John H. Connerse.
Miss M· M. Haines.
Miss Margaret Newlin
Mrs Calvin Pardee.
Mrs. Justus Strawbridge.
Mrs. F. L.Speppard.
Miss M. Carey. Thomas.
Miss Juliana Wood.
Miss E. M. Mac Nickar.

明治廿七年二月十四日內務省許可
明治三十年七月九日印刷
明治三十年七月十日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲（電話本局十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日逓信省認可

（四四五）